

評伝 矢内原忠雄 (上)

A Critical Biography of YANAIHARA Tadao (Part 12)

関 口 安 義

SEKIGUCHI Yasuyoshi

第十二章 闘う宣教者

一 総長と伝道

東京大学総長としての矢内原忠雄の仕事は際限なく、多忙を極めた。が、そうした中でも彼は個人誌『嘉信』の刊行を続け、日曜日の聖書講義（今井館聖書講堂）も引き続き行っていた。その努力たるや尋常でない。

総長の仕事はあらゆる面にかかわっていた。東大所屬の施設巡りだけでも大変である。が、彼はもともと好奇心旺盛な人であり、興味や関心があると、どこへでも出かけた。ここに一通の便りがある。

「山梨県山中梁尻やまじりより」東京の自宅（目黒区自由ヶ丘）の妻恵子宛のものである。^{〔1〕}「梁尻」とは、山中湖の西北の地名で、そこに忠雄は戦前から仕事場としての別荘を持っていた。そのことは第九章の二で、すでに詳しく触れている。

便りは、総長の仕事としての東大農場や東大演習林視察のことを記したものだ。視察旅行中も『嘉信』の原稿を書き、聖書講義のことを考える矢内原忠雄を垣間見ることのできる書簡である。長くなるが当時の仕事の一端が窺える大事な書簡なので、あえて全文を引用する。

自由ヶ丘の家から二宮の東大農場（筆者注、田無演習林）まで一時間四十分、十二時についた。ここは果樹の農場で、本郷の農学部から農場長の野口教授以下先着で、余の到着を待つてく

れた。ここで二時間あまり昼食と視察に費し(温室にメロンがたくさん出来ていた。但し未熟)、そこからは演習林長の案内で、自動車二台を連ねて、籠坂峠から山中の東大演習林まで一時間四十分。午後四時到着した。一寸事務所に休んでから、ヤナジリの家へ行き、荷物をおろして、又演習林に引き返し、寮を視察などして、ここで皆さんと夕食を共にし、九時辞去して、ヤナジリに落ちついた。雨は大したことはなかつたが、涼しくて、寒い位。もつて来た中の一番厚いシャツを着て、タビをはいた。今朝は四時から嘉信の原稿を作り、やつと昼前に完成。昼すぎ発つて東京に帰る本間秘書にもたせて清水印刷所に届けることにする。

右の歯が大分よく成つたと思つたら、今度は左の歯グキがはれてしまつた。二、三日前から怪しかつたのだが、昨日自動車の中で痛み出し、今朝は口をあけることも困難な位。物がかめないで、食事に困つた。しかし左の方は歯根膜炎でなく、歯グキがはれたのだから、二三日すればよくなるだらう。

身心とも、骨の髄から疲れているやうに感ずる。

千葉、伏木両嬢とも、元気で、忠実、よく世話してくれまう。黒崎さん、夫婦だけで来ていられる。またお会ひしない。市田さんは風邪で休んでいられるさうだが、まだお尋ねしませぬ。今日午後、両家とも訪ねるつもりだが、本当は誰にも会はずに、フトンをかぶつて寝ていたい。

大出山おおでやまの中腹、市田さんの家の奥の方に、大森さんのバンガローが十いくつ建つた。まだ誰も来ていないが、夏はウルサイ事だらう。

「総長」は、どこへ行つても、お供や案内が多くて、ウルサイ。本当にお前の言ふ通り「いい気になつては、いけません」だ。ボンヤリしていて、馬鹿になりたい。

「仕事」「仕事」つて、仕事は何だ。何もかも、おつぱり出してしまひたい。と思ふが、さうもいかないな。

これから「詩篇講義」の原稿を整理して、「聖書講義」として出版の準備をするつもりです。

この手紙は本間君にたのんで、東京でポストに入れて貰ひます。

山中にて

右の便りは、総長として東大所属の農場や演習林の視察の記録でもある。時は一九五二(昭和二七)年七月十一日、大学は夏期休暇中であつた。総長就任七ヶ月、ようやく大学の全貌が掴めはじめたころのことだ。

冒頭の「二宮の東大農場」は、西武新宿線田無駅北口から歩いて八分ほどの所にある(現、西東京市緑町一―二)。忠雄は当日、自由ヶ丘の自宅から「二宮の東大農場」まで電車と徒歩で行つた。ここでは二時間あまり農場視察と昼食に費やし、午後、東大関係者の一行は、自動車二台を連ねて、演習林長の案内で、山中湖近くの東大演習林へ行く。

東大は千葉・秩父・田無、北海道などに演習林を持つている。その中から東京からは比較的近い田無と、自身の別荘もある山中湖の富士演習林(現、富士癒しの森研究所)が、選ばれたようだ。高速道路の中央自動車道開通以前のことゆえ、旧道を走つて、田無から一時

間四十分もかかっている。午後四時に事務所に着いた忠雄は、ちよつと休んだ後、山中湖畔にある梁尻の別荘に荷物を置きに行き、また、演習林に引き返し、寮を視察する。夕食は一行と共に、九時にその日の仕事を終える。夜は梁尻の家に泊まる。

総長就任以来、多事多難の日々を送り、忠雄は疲れ切っていた。彼は「身心とも、骨の髄から疲れているやうに感ずる」と言い、「本当は誰にも会はずに、フトンをかぶつて寝ていたい」とぼやき、「仕事が何だ。何もかも、おつぼり出してしまひたい。と思ふが、さうもいかない」と苦しい心情を妻恵子に吐露している。その上歯の痛みに苦しめられる。歯が悪くなつたのは、戦中からのことであり、戦後は食糧難の中、いっそう悪化していた。便りには「右の歯が大分よく成つたと思つたら、今度は左の歯グキがはれてしまつた。二、三日前から怪しかつたのだが、昨日自動車の中で痛み出し、今朝は口をあけることも困難な位。物がかめないの、食事に困つた」とあるように、かなりひどい。重症である。

夫人の恵子は、こうした状況の忠雄を氣遣い、よく支えた。精神的にも忠雄の立場をよく理解した賢妻である。「総長」は、どこへ行つても、お供や案内が多くて、ウルサイ。本当にお前の言ふ通り「いい氣になつては、いけません」だ」には、夫をそれとなく諫める妻の目を感じることも出来る。

演習林視察という公務にあつても、彼は早朝四時には起きて『嘉信』の原稿を書き、次に刊行する聖書講義をまとめた本を考えている。東大総長の仕事という行政職と、研究論文を書くことや聖書講義とは、全く異質の世界である。が、彼はそれをやり抜く。

ポポロ事件後、学生運動は高揚し、総長矢内原忠雄を悩ましてい

た。彼はそうした状況にも真摯に当たり、悩みながらも前進した。この年彼は雑誌『世界』九月号に、学生運動に対しての所感「私はこう思う」(のち「学生及び学生運動について」と改題、「大学について」収録)を寄稿している。すでにふれた学生運動に対処する大学側の考え——いわゆる「矢内原三原則」を敷衍したものと言えようか。今一度確認するという面持ちで彼は、「私の考えるところによれば、大学当局者が学生に示すべき明確な線は、第一に、大学は学問の自由を守るという原則、第二には、大学は暴力及び非合法の行動を容認しない、ということである。いろいろの事件の処理に対して、この二つの原則を明確に維持することが、学生運動を指導するために大学側のもつべき責任であつて、そのために三つめの原則、——時に学生に対する懲戒処分をやむなきに至ることもある」とする。

要するに「学の内外に対して真理の探究者としての毅然たる態度を維持することが必要」というのである。さらに「いかなる思想傾向の学生であつても偏り見ることなくして、学生に対して愛と理解と同情と親切をもつことが、教育者としての大学当局者の心構えであるべきであり、しかも一方大学の自由と学問の権威に関し、守るべきところを毅然として守らなければならない」と言う。学生運動の終息した時点では、これはきわめて真つ当な見解に見える。が、当時はこうした考えは、反動扱いされかねないものであつた。「矢内原三原則」が、守れなくなつていくところに当時の日本の大学の現実があつたとしてよからう。戦後の国際情勢、それに国内情勢がからんで、大学の自由・自治を守ることの困難さを、総長になつた矢内原忠雄は、痛いほど感じていたのである。

前章で述べたように、一九四六(昭和二十一年)三月の第一日曜日(三

日)から、矢内原忠雄はそれまで手狭な自宅で行ってきた日曜家庭集会を、自宅近くの今井館聖書講堂に移し、以後日曜日毎に公開聖書講義を行うことになる。今井館聖書講堂は東急東横線・都立高校駅(現・都立大学駅)下車、鉄道に沿って自由が丘駅方面に向かつて徒歩約七分の地にある。静かな住宅地の一角である。自由が丘の自宅からも近い、木造平屋建て五十坪ほどの講堂である。これもすでに述べたところだが、もともとは大阪の香料商人の今井樟太郎が、内村鑑三に献じた建物である。新宿淀橋町柏木(現・新宿区北新宿)の内村邸に建てられ、そこで鑑三が終生聖書講義を行った。が、一九三五(昭和一〇)年の区画整理の際に現在の地、東京都目黒区中根一―一四―九の地に移転していた。

矢内原忠雄が日曜日に聖書講義をするのに、今井館聖書講堂は実にふさわしい場であったとしたい。師内村鑑三ゆかりの建物だからである。しかも、閑静な住宅地にある。この建物は現存し、現在は隣に今井館資料館が建ち、内村鑑三はむろんのこと無教会主義に立つキリスト者関係の書籍や参考資料が集められ、NPO法人今井館教友会の手で運営されている。

ところで、『嘉信』第九卷第二号(一九四六年二月)に、「公開聖書講義」と題した関連記事を見出すことが出来る。引用しよう。

私はもう十年以上も自宅で聖書講義の日曜集会をして来たが、それは嚴重な銚衡をした上ごく少数の青年の入会を許すだけであつた。然るに昨年八月終戦以来私はこの家庭集会を開放して、何処かもつと広い処で公開聖書講義を開きたいと考へた。之まで密室にて語りたることを屋上より宣べ伝へ、弟子

の中に束ねたる教を弘く世に展開する時が来たのである。この戦争に生きのびた我らは、声を大にし、力を尽して聖書の真理の証明に従事しなければならぬ。世界はそれを要求し、日本はそれを必要とする。今は福音高唱の絶好の機会であつて、空しくこの好機を逸してはならないのである。幸に私の家の近くにある今井館聖書講堂の借用を許されたので、来る三月の第一日曜日(三日)以後毎週日曜日午前十時より約二時間、同所に於いて公開聖書講義を開き、路の傍、垣の辺の人をも招きたく思ふ。但し真理を求むる真実の心を持つて来聴せられることが絶対必要である。

交通は東横線都立高校駅下車、広い道路を約十分、左側、材木置場と町会事務所との中間の横町を左折、すぐまた左折、左側二軒目。(目黒区中根町一九五 今井館聖書講堂)

若しくは自由ヶ丘駅下車、露店の出で居る道を真直に約十分、前記の広き道路に出で、右折、すぐ町会事務所の先の横丁を右折、後は前に同じ。都立高校駅からでも略々等距離です。

聴講料は毎回五十銭

開会時刻(午前十時)厳守。

聖書賛美歌持参の事。但し所有せざる者は受付に申出づること。

履物は脱いで上る事。

最初の今井館での聖書講義の開講の辞の概略は、「路傍の人 今井館聖書講義開講の辞要旨」として、『嘉信』第九卷第4号(一九四六・四)に載っている。1―3という章句切りが見られるこの「開講の

辞」で、矢内原忠雄は家庭集会から今井館での公開聖書講義に切り替えるに至った動機を述べる。終戦がその決心を促したとのこと。彼は言う。「終戦と共に従来警察的な弾圧と束縛とが取り除かれ国民の基督教に対する態度も偏見的でなくなり、伝道には非常に都合のよい時となったのである。将来或ひは反動が来るかも知れないが、今は福音宣伝の絶好のチャンスである。愚図愚図してこの好機を逸すべきではないのである」と。今井館聖書講堂は、彼の伝道のよき場となったのである。

当時の矢内原忠雄を巧みに描いた長谷川町子の漫画「思いでの人 矢内原忠雄先生」^③は、戦後の忠雄の人となりを活写して圧巻である。今井館資料館では、全集からこのページをコピーして入館者に受付で無料配布している。わたしは第九章において、彼が戦時下の弾圧の中で、優しく、ジョークを解する人から、厳格で恐い人となり、妻子や弟子たちからも怖がられた人となったことに言及した。長谷川町子の右の「思いでの人 矢内原忠雄先生」は、そのような「厳格で恐い人」で、講壇からアクビをした聴講者を叱りとばす忠雄を描く一方で、親切で、やさしく、人に尽くすことに常に想いを秘めた人であったことも巧みに描き出す。

最初の講義日に彼は「マタイによる福音書」22の1〜14節と「ルカによる福音書」14の15〜24に見られる「婚宴」のたとえ（「大宴会」のたとえ）をとりあげる。そして「モーセの律法と預言者の教訓とを受け来つた学者・パリサイ人等ユダヤ人指導者階級は辞を構へてこの招待を断りイエスに来ることを為さなかつたから、神は彼等を捨て給うた」と言い、「而してユダヤ人中軽蔑せられた貧者・不具者などをその代りに招き、更に田舎の路傍の人にも譬ふべき異

邦人をも強ひてこの宴会に呼び入れ給うたのである。併し新に招かれた者も礼服だけは着用して来なければならぬ。礼服とは「真実な心」である」とする。これによってイエスの福音がいかに革命的であり、恩恵的であり、清新なものであつたかが分かるとも彼は言う。「柔和にして寄るべき弱者に対して如何に温きか」とも言い添える。

矢内原忠雄は日本のキリスト教伝道を顧み、今、新たな伝道の季節トが来ていることを言う。そして「我らは過去の指導者階級や、名ありて実なき基督教徒に何の期待をも有たない。我らの招く者は罪人、貧者、不具者、路傍の人。己が弱きに泣く人、基督教について未だ知るところなき新人である。何の希望もなく、光のあるところを知らずして路傍にたたずむわが同胞の腕を取りて、私は無理矢理にでも此処へ連れて来たいと思ふ。それはキリストの福音だけがこの暗澹たる敗戦日本にありて人に希望をあたへ、国に復興の生命を供給するものだからである」とも言う。矢内原忠雄は確信を持って戦後日本の伝道に取り組んだのである。日曜の今井館聖書講堂での集会と『嘉信』の刊行は、彼の伝道における車の両輪として存在した。それは東大総長という激務に就いても変わらなかつた。前章でふれたように、結局は「私にとつては総長の仕事は集会と雑誌を刺戟し、集会と雑誌の仕事は総長の職務に智慧と力を供給したやうに思はれる」（『嘉信』短信「一九五七・一二」と書くように、忙しくはあつても伝道と東大総長職は両立し得たのである。

他にも彼は戦後東大に復帰してから、東大聖書研究会（戦前の帝大聖書研究会）を復興している。帝大聖書研究会は、すでに述べたことながら彼がヨーロッパ留学から帰って、内村鑑三の聖書研究会員

中の有志と作ったサークルであり、一九三七(昭和一二)年十二月に大学を追われたあと、解散していた。その再開は、彼にとつての念願であった。

前章で述べたように、一九四六(昭和二一)年三月二十六日に復興を記念した集會を持ち、忠雄は「民主戦線と基督教」と題した講演を行っている。東大聖書研究会は、矢内原忠雄の伝道の一拠点であった。一九五七(昭和三二)年十二月二十二日の東大聖書研究会主催クリスマス講演で、彼は「知ると信ずる」と題して講演をするが、そこで彼はこの研究会の成立から中断・復活までの歴史を振り返り、「少数のクリスチャンの教授と学生のおろことが大学の塩となり光となつて、大学を腐敗と墮落から救うものである」と語っている。今日にも通じる貴重な提言と言つてよい。

矢内原忠雄の戦後の活躍はめざましい。一九四六(昭和二一)年三月三十一日、今井館聖書講堂での内村鑑三記念講演会で、忠雄は「内村鑑三の十の戦い」と題した講演を行う。『嘉信』一九四六(昭和二二)年四月の「雑報」欄には、「三月三十一日の今井館に於ける内村鑑三先生記念講演会は会衆二一八名、座席足らず、収容に困難した。この建物が此の場所に建てられてから、恐らく初めての盛会であつたと思はれる。私は藤井武の霊をよび起し、彼の助けを得て、彼と二人で語つたから非常に楽であつた」とある。

他方、忠雄の伝道活動の一環としての山中湖畔聖書講習會は、一九三八(昭和一三)年から洗心楼という旅館を会場として行われていた。⁴⁾が、一九四四、五(昭和一九、二〇)年は、宿舍の洗心楼が学童疎開のためにふさがり、開くことが出来なかつた。戦後第一回に当たる一九四六(昭和二一)年の山中湖畔聖書講習會は、第七回と

いうことになる。会場は従来通り先心楼であつた。忠雄の記した「第七回山中聖書講習會記」(『嘉信』第九卷第九号、一九四六・九によると、「講義はエリヤ伝、箴言大意、詩篇(第一四三篇及一四七篇)。前二つを毎日午前、詩篇は午後とし、午後の講義は大出山の林の中、湖水の見える傾斜の草の上に坐してした。足もとに百合がほほえみ、小鳥は枝の上に耳をかたむけた」とある。大出山(標高九八九メートル)は矢内原家の別荘の北側にあり、忠雄の散策の場でもあつた。

矢内原忠雄の戦後の伝道活動は、毎日曜日の今井館聖書講義を中心に、東大聖書研究会、夏の山中湖畔聖書講習會、さらには新潟県の妙高、鳥取県の大山、岡山県の吉備、静岡県御殿場など、全国各地におよぶ。それは東大総長在任中も退任後も、その死に至るまで続いた。特に敗戦直後の一九四六、七年の伝道旅行は、目を見張るばかりである。彼はその記録を『嘉信』一九四六(昭和二一)年十一月号(第九卷第一〇〜一二)の「南車北車記」その他に書いている。彼は東大総長となつても、大学行政とキリスト教の伝道という重い二つの使命を両立させて邁進する。しかしながら、矢内原忠雄にとつて優先すべきは、何よりも信仰であり、伝道であつた。量義治はこうした矢内原忠雄を評して、「矢内原においては、信仰はかりよしが他の一切のものの「源泉」であり、学問ですら、信仰の「一部分」となつている、と言つても差し支えないであろう」と評している。

二 無教会主義

ここで矢内原忠雄の寄つて立つた無教会主義⁵⁾の伝道に関して考えておこう。無教会主義とは、矢内原忠雄の師内村鑑三によつて唱え

られた牧会・伝道のあり方をいう。宣教師を通しての助成金に頼った伝道、また教派至上主義による伝道のさまざまな弊害は、内村鑑三という無比なキリスト者によって断罪され、ここに日本独特の無教会主義という、キリスト教の集いを誕生させたのである。

矢内原忠雄に「日本の基督教」という評論がある。そこで彼は無教会主義を説明し、「無教会主義の主張は、『人は教会に属しなくても基督教者であり得る。』といふにある。それがどれほどの革命的意義を有つ主張であるかを知るためには、教会といふ制度について説明しなければならぬ」と言う。そして「無教会の信仰は『純福音』である。教会も理論的・抽象的には『信仰のみ』で人の救はれることを承認するけれども、実際問題としては教会の会員となることを要求し、若しくは教会から脱退する自由を容易に認めず、そのため信者に束縛と圧迫を感じしめる場合も少なくない。この教会といふ制度からの解放を宣べ伝へるものが無教会主義であるのだ」と断言する。明快な無教会主義の規定である。さらに彼は次のように言う。

ロマ・カトリックでは、教会制度は最も嚴重で、世界にはロマ法王を首長とする一つの教会しか有り得ず、カトリックでない者は基督教者ではないと主張して居た。これに対し、人はカトリックでなくても基督教者たり得るを主張したのが、ルッターの宗教改革であつた。然るにルッター自身教会制度をつくつたから、其の点では彼はカトリック主義を脱却し切れず、人はカトリックでなくても救はれるが、教会員でなくては基督教者と認められない、といふ解釈の伝統を残したのである。このルッターの宗教改革を再改革して、基督教者の自由を前進せしめ、人は信

仰のみによつて救はれるといふ聖書の教へを徹底させたものが、内村鑑三の無教会主義である。内村鑑三はこの教へを外国から学んだのではない。彼自身が聖書にもとづき、彼の体験を通して神から啓示せられたのである。

内村鑑三は無教会主義を、「監督なし、牧師なし、伝道師なし、憲法なし、洗礼なし、聖餐式なし、按手礼なし、楽器と教壇とを備へたる教会なし」と「新教会」と題した断章で述べた。制度や建物やオルガンなどの楽器を持たなくとも、信仰の集いそのものが教会だというのである。これはイエスの教え、「二人または三人がわたしの名によつて集まるところには、わたしもその中にいるのである」〔新共同訳「聖書」「マタイによる福音書」18:20〕が、意識されている。日本のプロテスタント各派は、伝道開始後、信仰告白や憲法・規則などが整うとともに問題も噴出した。一例をあげよう。旧日本基督教教会教職であつた田村直臣は、一八九三(明治二六)年にニューヨークの出版社から *The Japanese Bride* という本を出す。直後、日本語訳『日本の花嫁』(二三冊)が出るが、当時のことばでいう「風俗壊乱」の理由で発売禁止になる。これは当時の日本の花嫁の姿をやや誇張して英文で綴り、その悲惨な状況を訴えたもので、一種の啓蒙の書であつた。

ところが、本書に対し、一八九三年七月二十二日刊行の *Japan Weekly Mail* が最初に疑問の声を上げ、次いで新聞『日本』、『萬朝報』などが、これを日本の恥として報道した。続いて日本基督教教会の機関誌『福音新報』をはじめ『女学雑誌』など、キリスト教系ジャーナリズムが、*The Japanese Bride* を日本人の恥辱を公表

し、日本人を貶めたものとしてきびしく批判することになる。

『福音新報』(主幹植村正久)は、第一二七号(一八九三・八・一三)の巻頭言で、『日本の花嫁』を批判したのにはじまり、田村批判を執拗に行つた(第一二九号、一三〇号など)。田村の属する第一東京中会では、こうした流れを受けて、この本が「虚実ヲ混淆シ妄リニ日本人民ノ恥辱トナルコトヲ記載」したものととして、「日本基督教会教師ノ職ヲ汚シタルモノ」であるという理由で譴責処分(戒規)を打ち出した。田村は教派の憲法・規則に基づき、大会に上告したが、翌一八九四(明治二七)年七月の大会でも、同様の理由と、さらに「反省セズ悔悟セザル」と追い打ちを掛け、田村直臣の牧師としての資質を問題視した。その結果は、「教師の職に適せず」という動議が可決され、田村の日本基督教会教職の身分を剥奪するという事件となる。

内村鑑三は日本基督教会大会でのこの処置を知り、直ちに「豈惟^{あはむと}り田村氏のみならんや」を『國民之友』(第一五卷・三三三号、一八九四・七・一三)に投稿(時事欄)、そこで彼は、「若し『日本の花嫁』を書きたる程の過失を以て之れを売国奴なりと罵るべくんば、日本の言論界は極めて狭隘なる者也。吾人は平生必ずしも田村氏に感服する者に非るも、日本基督教会が名を之れに藉りて、氏が教師職を剥奪したるをば正当の処置なりと信じる能はず」と書いた。また、外国人宣教師のバラ(J. H. Ballagh)やフルベッキ(Guido F. Verbeck)らも、これに反対であることを表明した。これは「『日本の花嫁』事件」として知られるものである。

田村直臣には『信仰五十年史』^⑩という自伝もあるが、一八五八(安政五)年九月十五日、大阪堂島の生まれ。東京一致神学校を卒業、

銀座教会牧師となる。一八八二(明治一五)年アメリカに留学、オーボン神学校およびプリンストン神学校に学び、帰国後銀座教会に戻り、数寄屋橋の地に大教会を建築移転し、数寄屋橋教会と改称する。この時期田村から洗礼を施された信者に、詩人・評論家の北村透谷がいた。

欧化主義の風潮の中、各方面から注目される時の人として華々しい活躍をしていた田村直臣が、なぜ事実を書いた本、*The Japanese Bride*で大会から「教師ニアルマジキ輕佻浮薄ナル著述ヲナシテ同胞ヲ侮辱シ……」という処分判決を受け、日本基督教会の牧師の地位を追われたのか。真の理由は判然としない。反動の時代にあった当時の日本の教会が、革新的書物とも言える本書を受け入れなかったと言つてしまえばそれまでだが、そこにはやはり教会制度や運営する人間に問題があったと言わざるを得ない。それはまさに悪しき宗教裁判であったのだ。彼が日本基督教会に復帰が認められるには時間を要し、何と三十二年後の一九二六(大正一五)年のことであった。なお、この問題を扱った武田清子の『人間觀の相剋』(弘文堂、一九五九・八)には、失意の田村直臣を見舞つたのは、内村鑑三一人であったという田村夫人の証言が引かれている。

田村直臣には、『子どもの権利』(警醒社書店、一九一・九)という先見性に満ちた本もある。この本の「自序」で田村は、「不肖ながら私が『子どもの権利』と題して一冊の書物を著述致しました事は、多分世界に於て私が初めてであらうと思ふ」と記している。田村は弱者としての女性や子どもの権利を省みた、時代の先を行く牧師・評論家であった。他にも田村の仕事には、東京一致神学校に教鞭をとりながら、日本伝道学校を興したり、自営館という苦学生のため

の寮の経営、さらには教育関係のさまざまな著作の刊行がある。『子供の権利』もその一つであった。聖書研究や文学上での仕事、中でも聖書コンコルダンスの編集と聖書注解、それに日曜学校生徒を意識した児童文学関係の仕事は、とかく忘れがちだが、落とすことができない。

田村直臣は『信仰五十年史』の中で、「私の文学界に於て、最も誇りとすべき事は、言文一致で『童蒙道しるべ』と題する児童の書物を公にした事である。日本に於て、児童の文学に筆を下した者は、誰よりも私が最先である」と自負している。確かにリチャード・ニュートンの翻訳から成る彼の〈童蒙もの〉は、日本の児童文学の先駆として位置づけられる。それは巖谷小波らの活躍に先立つ仕事だったのである^①。

本筋に戻ろう。内村鑑三は「『日本の花嫁』事件」を引き起こすような日本の教会の現状を知るにつれ、一九〇〇（明治三三）年頃から積極的に無教会主義を主張するようになる。前述のように無教会主義では、聖書とキリストの贖罪による信仰のみが大事とされる。それ故さまざまな式文や教職制度、礼典などは、必要不可欠とはされない。そして何よりも聖書研究が重視される。しかし、実際には内村鑑三も矢内原忠雄も洗礼を受けており、既成教会を全否定するものではなかった。矢内原忠雄は台湾や朝鮮旅行では、旧日本基督教教会はじめ、多くのプロテスタント教会でキリスト教の講演を行っている。要は無教会主義では、神によって召し出された者の集まるところに、神の教会は成立するというのである。この原理は、既成教派の指導者が軽々に否定できるものではなかった。

現実の日本の諸教派は、教勢が伸び、制度が整うにつれ、教派の

憲法・規則に縛られ、その違反者を糾弾することに熱心であった。また、教派の組織を維持するためのさまざまな委員会を教職中心に誕生させた。その結果、そうした各種委員会の出席に時間と労力を奪われ、肝心の聖書研究という原点を見失っていく。それは第二次世界大戦後の今日のプロテスタント各派の組織にも言えることである。そうした既成教派組織へのアンチテーゼとしての精神が、無教会主義には脈打っていたのである。

無教会研究会編『無教会史Ⅲ』^②には、日本基督教団の論客竹森満佐一（当時東京神学大学教授）の「キリストの身体なる教会―無教会キリスト教をめぐって―」が収められている。これは右のような考えに立つ無教会主義への疑問を投げかけたものである。この論は、無教会主義に立つ関根正雄の『無教会キリスト教』（アテネ文庫44、弘文堂、一九四九・二）への疑問を投げかけたものである。竹森は「関根氏の新著『無教会キリスト教』を読んでさまざまな感慨にうたれた」にはじまり、無教会の人々が、「いかにこの世における教会を知らないか」を衝く。これは率直な言辞で無教会主義を批判した文章で、現実の世における教会の意味を問うている。関根正雄の「世俗性の問題―竹森氏の批判に答う」（『基督教文化』39、一九四九・九）という論理に貫かれた反論が、竹森の文章とペアになって右の本に収録されている。双方の主張はかみ合わないものの、論争そのものには学ぶところが多い。

内村鑑三は『基督信徒の慰』（警醒社、一八九三・二）で、最初に「無教会」ということばを遣った。キリスト教の発展と共に教会という組織には、さまざまな問題が入り込んできた。キリストの権威ならぬ人間の権威・世の権威がまかり通ったり、墮落した組織のみが幅

を利かすということも確かにあつた。無教会主義は、組織としての世俗教会の権威からの脱却を目指す主義と言つたらよいのであろう。それはルターの宗教改革における聖書のみ・万人祭司の主張とも重なる。

前述のように内村鑑三は「監督なし、牧師なし、伝道師なし、憲法なし、洗礼なし、聖餐式なし、按手礼なし、楽器と教壇とを備へたる教会なし」と無教会主義を規定した。それは矢内原忠雄が若き日のイギリス留学中に、スコットランドのインバネスの小さな教会に見出したものでもあつた(本論第五章の二参照)。矢内原忠雄の「無教会主義論」と題した論文(『矢内原忠雄全集』第一五巻収録)は、黒崎幸吉が主宰した月刊雑誌『永遠の生命』に連載(一九三二・四、五、六、八)されたものである。その冒頭に「無教会主義」という名称にふれた個所があるので、引用する。

無教会主義とは先生(筆者注、内村鑑三)独創の語である。凡てが翻訳である我国基督教史に於て、之は又何と大胆なる新語であらう乎。それは単に日本の基督教会の欧米基督教会よりの独立といふに止まらない、実に教会そのものよりの独立である。言ふ迄もなく無教会主義なる語は消極的否定的であつて、積極的建設的ではない。併し乍らそれは教会主義に対する戦闘の語であつた。而して戦闘の語はおのづから否定的消極的たらざるを得ない。敵を否定するもので無ければ戦闘語にはなり得ないのである。カトリックに対するプロテスタント(抗議者)、それは否定的名称であるが、正にその故にこそ戦闘的であるのだ。英国国教会に対するノン・コンフォーミスト(不一致派)、

それも亦消極的名称であるが、正にその故にこそ戦闘精神を表現し得たのである。内村先生の無教会主義も同様である。それは戦の語であるから、是非とも否定的名称を取らなければならなかつた。之をその信仰の積極的内容より見て十字架主義又は純福音主義と呼んだのでは内村先生の戦を表現するに適しないのである。先生の歴史上の意義を明確にし、先生の存在を平凡化せざらんが為めには、是非とも無教会主義の名を固執しなければならぬ。無教会主義は内村先生の信仰であり精神であつた。併し若しそれが神の霊によりて動かされし信仰であり、現代の基督教界に対し特別の使命を以て神より出でし警告であるとするならば、それは内村先生よりも大なるものでなければならぬ。

実に巧みな無教会主義の説明だ。無教会主義なる語は、消極的否定的名称ではあるが、戦闘的表現となり得た。それは「カトリックに対するプロテスタント(抗議者)」「英国国教会に対するノン・コンフォーミスト(不一致派)」と同様であるという指摘など、明快で、説得力に満ちている。

忠雄の「其後の無教会主義」(『基督信徒之友』一九三五・三)では、内村鑑三没後の無教会主義を展望し、第一に独立伝道に従事する同志が輩出し、多くの集会和雑誌があること、第二に聖書の学問的研究の水準が高くなつたこと、第三にギリシャ語とヘブル語研究が普及したこと、第四に内村鑑三記念講演会が数度開かれ、大成功をおさめたことの四点が強調される。

その上で「併しただ一つだけ先生の独占がある。それは愛する国

民から国賊呼ばはりをせられたことである」と言う。内村鑑三の無教会主義の特色は、ここにあったと言わんとするかのようである。最後に彼は、「先生の凡ての長所が多くの弟子達によつて受け継がれても、右の点だけは今尚先生の独占的名誉(?)である」と書くが、右の論文発表二年後、自らも「愛する国民から国賊呼ばはり」されようとは、思いもよらぬことであつた。この点でも矢内原忠雄は、内村鑑三と同じ道を歩んだ弟子と言えよう。

「宗教改革論」(「嘉信」一九四〇・一二)で忠雄は、無教会主義の歴史的作用について簡潔に語る。ここでは「人は信仰のみによりて義とせられ、教会員たるを必要としないこと。神を絶対に義として、自己をむなしくする生活態度。国家の道徳を強調する預言者の愛国心。而してエクレンシヤの靈的意義を明かにするものとして、一切の教会制度的障壁廃止の主張。之らはすべて無教会主義の信仰の特色を為すものである」とされる。政池仁は「無教会信者・矢内原忠雄」で、「矢内原先生は最も典型的な無教会伝道者であつた」と言い、内村鑑三の「闘い残した闘い」を闘つたとする。

国家至上主義を謳う日本は、やがて太平洋戦争への道を歩み出す。矢内原忠雄の「宗教改革論」は、こうした時代背景を考慮に入れないと、その真意は理解できない。日本のキリスト教界は、戦争や神社参拝に強い反対を示し得ず、一九三八(昭和十三)年六月、日本基督教会大会議長だった富田満は朝鮮に行き、神社参拝を勧めるといふ大きな過ちを犯していた。

全体主義国家日本は、宗教団体の国家統制を考えはじめ。政府は国会に一九三九(昭和十四)年一月、宗教団体法案を提出、三月二十三日成立、四月八日に公布された。続いて同年十二月二十三日

には、勅令により宗教団体法施行令が公布され、翌年四月一日施行と定められる。加えて文部省は、一九四〇(昭和十五)年一月、省令で七十五条に亘る宗教団体法施行細則を発令する。こうした情勢下、日本のキリスト教は、カトリックが一九四一年五月三日付で日本天主教教団として設立認可、プロテスタントは三十余の教派が同年六月に合流して日本基督教団を結成し、日本基督教会大会議長の富田満が教団統理者に就任した。

こうして成立した日本基督教団は、その後戦争を教団の名において是認し、反対の態度を示し得なかつた。その上、国家宗教(神道)としての神社参拝を容認するばかりか、それを推進したのである。キリスト教各派の合同は、戦時体制への貢献という結果をもたらしたことになる。そうした中で矢内原忠雄は、右の「宗教改革論」の末尾で、「真に国を愛し、人類の歴史を愛し、神の国たるエクレンシアを実現する為めには、身を以てこの信仰の純粹性を守護し、且つその純粹なる信仰的展開を期さねばならないのである」と高らかに宣言する。

いわゆる十五年戦争開始の時期から矢内原忠雄は、純粹な信仰を求め、その上に立つて身を賭して日本帝国主義を批判し、全体主義と闘つた。彼は苦難の中で旧約聖書の預言者エレミヤ同様、崩壊の後に復興が来るとして「日本の理想を生かすために、一まづこの国を葬つて下さい」(「通信」一九三七・一〇)との叫びをあげること、東京帝国大学教授の職を失つたばかりか、非国民・国賊として非難の嵐に立ち向かわねばならなかつたのである。世間の人々は、彼を国の方針に背く危険人物とさえ見なした。彼の苦しみは、エレミヤの苦しみにも通じた。

彼が悲惨のどん底で書いた『余の尊敬する人物』(岩波書店、一九四〇・五)の巻頭に、「エレミヤ」を取り上げたのも故なしとしない。彼はエレミヤに自己を投影する。「愛する国の運命は、エレミヤの心にあります大なる問題となりました。神はこの国を滅し給ふのであらうか、救ひ給ふのであらうか、滅亡の徴候は明かに見えてゐる。かくも神に背き正義を押し付けて居ては、表面を如何に飾つても、内部は欠陥と腐敗に満ちて脆弱そのものであるが故に、外部よりの少しの圧力を以て国は崩壊せざるを得ないであらう」とは、当時のイスラエルを語っているのだが、それは太平洋戦争突入前夜の忠雄の「愛する国の運命」への思いと何と似ていることか。

矢内原忠雄はイスラエルの滅亡を取り上げて、日本の破滅への道を語っているかのようだ。暗く重苦しい時局の下、彼はひたすら聖書研究に集中する。それらは日曜家庭集会・お茶の水公開聖書講義・山中湖畔聖書講習会・各地(ソウル・松本・仙台など)の講義・講演に生かされ、個人誌『嘉信』に次々に発表されていく。日本のキリスト教会(筆者注、具体的には日本基督教団に吸収された既成の諸派キリスト教会を指す)が、宗教報国を謳い、国策に協力し、聖書やキリストが脇に置かれる状況にあつて、矢内原忠雄はひたすらパウロの言う「人は信仰のみによりて義とせられる」ことを信じ、一切の制度的束縛を離れた無教会主義を標榜し、己の信仰を護り、反戦・平和の声を絶やすことなく、思想的抵抗を続けたのである。

矢内原忠雄の無教会主義は、むろん終生の師内村鑑三譲りのものながら、戦時下日本のキリスト教界の現状とも深く関わっていた。最大教派であつた日本基督教会を中心とした教会合同は、日本基督教団を誕生させた。が、その行うことは教団統理が伊勢神宮を参拝

し、天照大神に教団の設立を報告したことに見られるように、矢内原忠雄の考えるキリスト教とは大きく離れたものであつた。彼の「宗教改革論」は、当時の日本基督教団の宗教報国の対極に存在した。彼は時局を無視するかのように聖書研究に集中した。

東京帝大教授を追われたことは、反語的言い方になるが、彼に幸いした。彼は大学教授の特権は奪われたものの、報国を絶えず口にする戦時下の教授会や学内の各種委員会から解放され、日々聖書研究に没頭し、その成果を各地での聖書講演会に生かすことが出来たのである。

マスコミという発表舞台を奪われた矢内原忠雄の活躍の場が、『嘉信』という個人誌によって支えられたことは、特筆しなければならぬ。彼の全体主義的国家への(謀叛の叫び)や無教会主義に立つ伝道は、『嘉信』抜きには語れない。それは師内村鑑三が『聖書之研究』を拠り所に、国家批判や聖書研究に励んだのに学んだかのようにある。また他の無教会主義に立つ人々が同じように個人誌を刊行し、国の前途を憂い、伝道と聖書研究に向かったのにも通う。内村鑑三の言う「紙上の教会」は、鑑三門下では、矢内原忠雄の『嘉信』と塚本虎二の『聖書知識』が双璧をなす。東京帝大辞職後、敗戦までのことは、前章までに詳しく述べたところだが、ここで矢内原忠雄自身の口から、個人誌『嘉信』のことを語って貰おう。以下は『私の歩んだ道』からの引用である。

私は前にいったように、昭和七年満洲で事件にあつたあと、『通信』というのを出したが、昭和十二年の十二月に辞職したときに、すぐに私は、自分の道を示され、その『通信』という

のを拡大して、キリスト教主義の月刊雑誌を出すことにした。昭和十三年一月にその創刊号を出したのですが、これが『嘉信』です。それから、私の家で、最初は十二、三人、後には三十四、五人くらいの青年が来まして、日曜日ごとに聖書の講義をした。

個人誌『嘉信』とともに、戦争中の忠雄の大きな仕事に土曜学校があったことは、すでに述べた。確認の意味も込めて、右の文章に続く忠雄の証言を聴こう。

もう一つは、土曜学校と私は名づけたのですが、毎週土曜日に、これも青年・学生の希望者——そうですね、やはり三十人もいましたか、——を集めて古典の講義を始めた。アウグスチヌスの『告白』を最初にやった。アウグスチヌスを三年やりました。『神の国』とか『三位一体論』とか。次にはダンテの『神曲』を三年かかってやって、それからミルトンの『パラダイス・ロスト(楽園喪失)』をやった。それから第二部として、アダム・スミスの『国富論』を講義した。これも三、四年もかかりましたね。それから、同じくミルトンの『パラダイス・リゲインド(楽園回復)』をやろうと思っていたときに、終戦になった。それが戦争中における私の仕事のおもなものです。

忠雄も言っていることだが、彼は大学を追われた時、それを試練とは受け止めても、「少しも落胆することなく、かへつて伝道上の仕事については前よりも自由になり、積極的な気もちになつて活動

した」¹⁵⁾のである。多くのクリスチャンが教団の勧めるがままに、神社参拝に走った。クリスチャンと称しながらも、家には神棚を置いた時代である。それは迫害から逃れるための申し開きの方便であったこともある。けれども、忠雄は逃れることも、ひるむこともなく無教会主義を高らかに宣言し、伝道に力を注いだ。土曜学校も広い意味では、その一つであった。それは軍国調教育に流される、日本の高等教育への意義申立でもあったのである。

すでにふれたが、一九四三(昭和一八)年七月三十日、北海道で伝道に励む無教会主義の浅見仙作が非戦論のため、札幌警察署特高課に召喚・留置される。忠雄は浅見の懲役三年という不当判決を知り、書簡(一九四四・八・二六付)で、彼を励ます。そればかりか、忠雄は大審院での控訴を傍聴し、その無罪を見届けることになる。無教会主義はきびしい時局の下で、より真価を発揮した。「日本の基督教」¹⁶⁾で矢内原忠雄は、戦時下の日本のキリスト教界を批判し、次のように言う。

戦争中日本の基督教は大なる試煉を受け、その多くの者が政府の強要に屈して迎合的態度を取り、ただ少数の者だけがその信仰を純粹に守ろうとして政府の弾圧と迫害とを蒙った。中には不幸であつた事は、プロテスタントの諸教会が政府の要求に応じて『日本基督教団』といふ統合体を作つたことである。プロテスタント諸教会の合同は理論的には望ましい事であるにしても、此の場合には教会内部からの機運が信仰的に熟して合同したのではなく、明白に政府の統制政策によりて強要せられた合同であり、信仰的には不純なものであつた。それはただ政府の

戦争政策徹底の機関として利用せられたに過ぎなかつたのである。

日本基督教団の成立はこのやうに信仰そのものの純粋性の喪失、戦争遂行政策への協力といふ二つの過誤を犯したのみでなく、教団に加入しなかつた基督者に対して政府の弾圧の下される契機となつた。それは教団への非加入者は、政府の戦争政策への非協力者として見られたからである。

戦後矢内原忠雄は、水を得た魚のように無教会主義に立つ伝道を行つた。敗戦二年の一九四七(昭和二三)年三月三十日の今井館講演「無教会早わかり」(『嘉信』第十卷第四号、一九四七・四掲載)で、忠雄は「人は制度教会に連ならなくても、基督者であり得る。そのことだけははつきりさせて置かなくてはなりません」と言っている。この指摘は、今日においても重い意味を持つ。それは開かれたキリスト教につながるからだ。

すぐれた日本文学の研究者であり、透谷や漱石、そして芥川龍之介や宮沢賢治の文学に造詣の深かつた佐藤泰正は、最後の著作となつた『文学の力とは何か』(翰林書房、二〇一五・六)で、「(ひらかれた宗教)の可能性とは、まさに今も残る教義と教団・教派という制度や組織がおのずからに生み出す権威、権力の強制、圧迫という矛盾を、いかにとり払って行くかという一点にある」と書くが、ここにはカトリック作家で『沈黙』を書いた遠藤周作の営為を想起してもよいものがある。さらに言うならば、それは内村鑑三や矢内原忠雄が目ざしたものとも重なる。

矢内原忠雄は「宗教改革論」で述べた、「真に国を愛し、人類の

歴史を愛し、神の国たるエクレシアを実現する為めには、身を以てこの信仰の純粋性を守護し、且つその純粋なる信仰的展開を期さねばならない」という信念の実現のため、新たな闘いに臨む。東京大学総長という激務をこなしながら、彼は聖書講義を続け、各地への講演に赴き、伝道月刊雑誌『嘉信』を休むことなく死に至るまで刊行し続けたのであつた。

ところで、矢内原忠雄の晩年、その戦後の歩みを検証していて落とすことの出来ないのは、スイス出身の改革派神学者エミール・ブルンナー(Emil Brunner)との交流があげられる。ブルンナーは一九二四(大正二三)年からチューリッヒ大学の神学部で組織神学・実践神学の教授(一九四二―一九四四年は同大総長)を勤めた神学者である。

ブルンナーは、日本がファシズムの勃興を招いたのは、キリスト教の宣教の不徹底にあつたとして、第二次世界大戦後来日し、一九五二(昭和二七)年九月以降、東京三鷹の国際基督教大学の教壇に立つことになる。この時期に忠雄はブルンナーと知り合いになり、短い期間ではあつたが、深く交わることとなる。忠雄はブルンナーを「親しい友人の一人」(『日本とキリスト教』)と呼んでいる。ブルンナーは日本に永住するつもりだったが、夫人の病のため一九五五(昭和三〇)年春、帰国した。ブルンナーのキリスト教理解は、「出会の神学」と呼ばれた。神が人と対峙する時、人は「否」か「然り」を問われる。その時、人は「然り」と応えることで、「新しい人」となり得るというのである。彼は日本の無教会主義に強い関心を示した神学者であつた。カール・バルト(Karl Barth)との「自然神学論争」でも知られる。

矢内原忠雄のブルンナーとの交流やその神学に言及した文章に、「ブルンナー博士を送る」(『嘉信』第一八巻第七号、一九五五・七)と、「日本とキリスト教 一九五五年六月十二日、日比谷公会堂、エミール・ブルンナー博士談別講演会における講演」(同)がある。双方とも『矢内原忠雄全集』第十五巻に収録されているので、簡単に目を通すことができ。前者で忠雄は、「博士は日本の無教会を正しく理解し、これに大きい望を嘱された。伝統的な教会の壁の中では生きたキリスト教の生命は栄えぬこと、牧師任せでなく平信徒各自が福音の証明と宣教に当たるべきことを博士は力説され、その意味で博士は教会に失望し、無教会に友を見出したことを、会の場で率直に告白された」と言う。

また、語を継いで、「ブルンナー博士が説かれたキリスト教の把握と伝道の方法について、私どもは格別に新しいものを見出さなかつた。それらはすべて内村鑑三先生が我々に教へ、遺して行かれたものに外ならなかつた。むしろブルンナー博士が日本の無教会に接して、喜悅と共鳴を感じた点が多くあつたのではあるまいか」とも言う。忠雄はブルンナーが、日本の無教会主義の宣教を正しく認識し、世界に紹介してくれたことを喜んでいたのである。

後者で忠雄は、ブルンナーは「教会と無教会との融和・提携といふ問題」を提起し、「教会と無教会との為に「橋をかける」といふこと」を提起していたとする。それに対して忠雄は、「教会も無教会も真実に謙遜に純粋にキリストの福音を信するならば、橋どころか、土台が一つでありますから、その間に何も問題はなくなる。ただ問題はいかに純粹に、いかに真実にキリストを愛し、キリストの福音を守るかといふ、その一点に帰するのであります」と明確に応

じている。

さらに忠雄は「キリスト教は外国の宗教ではありません」と言い、「キリスト教は世界の宗教であります。キリストの福音は人類の福音であります。それ故にまた日本のものでもあるのです」と言う。忠雄はインターナショナルの宗教としてキリスト教を位置づけようとしていたのである。無教会主義も日本で生まれたものであつても、世界宗教としてのキリスト教であるとの自負がそこにはあつたと言えよう。

三 平和への思いと沖繩旅行

東大総長矢内原忠雄の生活は、多忙を極めた。もつとも忙しさは、戦争の終了と共ににはじまっていた。東大に復帰し、社会科学研究所長・経済学部長・教養学部長を歴任し、総長職に就いた頃には、忙しさはピークに達していた。毎日曜日の今井館聖書講堂での聖書講義、全国各地での講演、大学の授業と会議、それに月刊誌『嘉信』の編集と執筆、さらには新聞・雑誌への寄稿と、彼は休みなく働いた。「私がいかに多忙な日々を送つてゐるかは、恐らく諸君の想像の外にあるであらう。十月一日経済学部長に補せられて以来、更に多忙を増し加へた」と書いたのは、記録によれば一九四八(昭和二三)年十月二十四日の未明のことである。大学人には、それぞれの学問分野での社会への貢献が求められている。また、総長ともなれば、さまざまな事象や事件に対し、見解を求められることもある。彼はそれらに誠実に対していた。特に平和問題には積極的に発言するようになる。

一九四八(昭和二三)年十二月に発足した安倍能成・大内兵衛・末川博・恒藤恭・矢内原忠雄ら学者で構成する平和問題談話会は、一九五〇(昭和二五)年一月十五日、「講和問題についての声明」を發表、全面講和・中立不可侵・国連加盟・軍事基地反対・経済的自立を主張した。これは雑誌『世界』三月号に掲載されたほか、『日本評論』『世界評論』『潮流』『評論』『人間』などの各誌にも載った。岩波書店の雑誌『世界』の初代編集長吉野源三郎は、平和問題談話会にかかわる学者の組織づくりに積極的にかかわった。戦時中に屈することなく国家権力と対峙した矢内原忠雄に、吉野は一目置いていた。彼は京大事件で最後まで闘った恒藤恭や日本政治思想史研究の丸山眞男らも含めた学者の組織づくりを進めたのである。

この頃、矢内原忠雄は『講和問題と平和問題』(河出書房、一九五〇・三)という一書を刊行していた。内容は講演「講和問題と平和問題」と論文「相対的平和論と絶対的平和論」とから成る。本書の中で忠雄は、〈永世中立に対する反対論〉を意識して、世界平和の達成のためには、〈必ずしも武力若しくは経済力〉による必要はなく、〈その掲げる理想の高いことと、その理想を達成する努力の熱誠なること〉によるとしている。この考えは、改憲論の起こる度に想起してよい平和論の古典ともなっている。

総長就任前後の矢内原忠雄は、時代の流れに常に敏感に反応している。それは一高南寮十番の仲間であった恒藤恭の歩みとも連動する。恒藤恭は戦後大阪商科大学学長を経て、一九四九(昭和二四)年四月から一九五七(昭和二三)年十月まで、二期八年大阪市立大学の学長を勤めた。これは矢内原忠雄の東大総長在任期間と重なる時期を含み、矢内原忠雄より二年半長い学長期間であったことにな

る。大阪商科大学学長時代から通算すると、何と十一年と十ヶ月もの長きに亘る。恒藤恭はなぜかくも長く公立大学の学長職にあったのか。それは選挙方法をめぐって、学内の文化系と理科系とが対立し、学長選挙内規がいつになってもできなかったことによる。そのため彼は一時万年学長の地位に置かれていたのである。

矢内原忠雄同様、戦前のファシズムに職を賭して抵抗し、気骨あるところを示した恒藤恭は、創設期の都市型大学である大阪市立大学にとつてなくてはならぬ存在となっていた。同様のことは、京大事件を恒藤とともに闘い、戦後立命館大学に二十年以上も総長として君臨した末川博についても言えるのである。二人とも関西の知識人の代表として、憲法擁護・反復古思想との闘いに奮闘した。彼らは東京の矢内原忠雄や丸山眞男らとの共同戦線を組んだ。なお、平和問題談話会に関しては、広川禎秀の「恒藤恭と平和問題談話会―時代の傍観を拒否した法哲学者」¹⁸⁾が参考になる。

一九五六(昭和三一)年一月十六日、自民党文教制度調査特別委員会は、教育委員会制度改正要綱を發表、教育委員会は公選制から任命制へと変わる。また、教科書検定の強化を目指した法案が政府によつて提出された。この教育二法(地方教育行政の組織及び運営に関する法案)と「教科書法案」の改正法案に、東京大学総長の矢内原忠雄は教育の危機を感じ、他の同志――南原繁・木下一雄・大内兵衛・大浜信泉・安倍能成・内田俊一・蟬山政道・上原専祿・務台理作と諮って「文教政策の傾向に関する声明」、――いわゆる十大学長声明を三月十九日付で出す。声明冒頭には、「教育は時の政治の動向によつて左右されてはならず、教育の制度と方針は政争の外において安定させるべきだが、最近、文教政策の傾向はこの原則をあ

やうきするように思われる。たとえば、教育委員会について、あるいはまた教科書制度について、そのいわゆる改正案をみると、いずれも部分的改正ではなく民主的教育制度を根本的に変えるようなものであり、ことに教育にたいする国家統制の復活をうながす傾向がはっきりしているのは、容易ならぬことといわねばならない」とある。その上で、こうした改革は慎重審議されるべきもので、改正案を急に作成し、国会通過をはかることは、厳に戒められなければならないという内容であった。

この声明は、同月二十三日、恒藤恭や末川博ら関西十三大学長によつて支持されることになる。恒藤恭や末川博は、彼らが戦前にかかわつた京大事件のながい体験などもふまえ、学問の自由や平和問題を真剣に考えていた。二人とも民主的な理想的な大学建設に努力しながら、日本国憲法と教育基本法を守るところに、真の平和教育が成り立つとした。恒藤恭は一九五四（昭和二九）年二月十日の『中部日本新聞』（『西日本新聞』同一三日付）に、「平和教育の課題」と題して、時の権力に左右されない教育の理想を語っていた。以下のようである。

学校教育の目的は、それからそれへと変動してゆく政権担当者の意向によつて左右されることをゆるさない。平和を愛する学校教師が学校における平和教育のために努力する自由は、つねに十分に尊重されねばならぬ。政府は今年から初めて三ヶ年の間に自衛力を十九万人前後に増強することをもくろみ、一方では保安庁法に重要な修正をほどこすとともに、他方ではいよいよ米国とのMSA協定の締結に乗り出している。このように

当面の政治情勢は平和憲法をかるんずるような方向に沿うて展開しているのであるが、教育、ことに学校教育の目的と理想は決してそうした政治情勢によつて影響されることなく、学校教育にたずさわる全教師諸君の一致した努力によつて堅持されなければならない。とりわけ平和教育の理想はあくまで貫徹されねばならぬ。

恒藤恭も末川博も戦後早くから教育の大事なことを、折りにふれて思っていた。そして憲法や教育基本法に則つた教育の必要性を訴えていたのである。矢内原忠雄らの教育二法反対声明支持を関西の十三大学学長と表明した直後の一九五六年四月五日付『人類共栄新聞』に、記者の質問に答えた恒藤恭の談話が載っている。彼はここで明治以来の教育の歴史を振り返つた後、「日本の教育が戦後新しく再出発するにあたつて、教育の理想、教育の方法が学校教育、社会教育と共に根本的に改められた。その一つの現われが教育委員会制度であり、国定教科書を廃した検定教科書制度である」と戦後の教育改革を評価する。そして、以下のように言う。

所が、今度政府が行なおうとする教育委員会制度の改正法案にしる、新しい教科書制度にしる、教育の基本精神に反しているし、教育の非民主化の方向へいくおそれがある。どうして教育制度を、今簡単に急いで改めようとするのか全く了解に苦しむところである。例えばフランスあたりでも教育制度が問題になって、戦後いくつもの内閣をへているが未だ正式な方向がきまつていない。日本では簡単に考えていく。きわ

めて危険なことだ。

また官公立の大学長の発言に対しての非難もあるが、私はそれは間違っていると思う。何故なら私たちも同じ国家の役人であって、言論の上では全く平等であり、同じ立場から批判すべきは当然だからである。

恒藤恭もまた、戦前・戦中の日本の暗い現実と闘ってきただけに、教育二法改正法案に黙っていることができなかつたのである。憲法を教育に生かすことは大事である。彼らの教育二法改正法案反対のよって立つところは、日本国憲法「第二十二條 学問の自由は、これを保障する」と、教育基本法「第一條 (教育の目的) 教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない」にあつたことは言うまでもない。当時京都に住んでいた恒藤恭が、一高以来の旧友矢内原忠雄はじめ、東京の十大学の教育二法に反対する声明に、末川博らと即座に支持するとの声明を、関西十三大学長連名で出すことができたのは、こうした背景があつたからなのである。

第二次世界大戦後、矢内原忠雄は平和がいかに大事かを実感していた。平和は自由と結びつく。彼にはおびただしい量の自由や平和に関する論考がある。それらは彼の著作に収録され、『矢内原忠雄全集』にも収められた。その平和論は、「絶対平和主義」であり、学問(科学)と結びつく。この点でも彼は生涯の師内村鑑三の衣鉢を継ぐとしてよいのである。これまでも、しばしば引用した『私の

歩んできた道』で、彼は聞き手の大塚久雄と次のような問答をしている。

大塚 今おつしやられた精神の充実といいますが、高揚といいますが、そういう中で、講義でも、お書きになったものでも、あるいは聖書研究会でも、私どもの一番印象に残っているのは一貫して「平和」を強く主張されたことですね。この点やはり同じく時代の動きに屈しなかつた人々の中でも、何か特殊な印象を受けたように感じております。

矢内原 平和についても、やはり信仰と学問、その両方からでした。その両方が私には矛盾しないで一つのものになつていた。私は信仰も幼稚だし、科学や学問だつて未熟な者ですが、私には私なりにその二つが一つの力になつておる。よく譬えに「一本の縄は弱いけれども、より合わせた縄は強い」と言われている。私にも信仰と科学がより合わされて、私の力になつておる。

一つはもちろん内村鑑三先生や新渡戸稲造先生の信仰の影響です。それから学問の方では吉野作造先生の政治史にしても、新渡戸先生の植民政策にしても、自分の研究した植民地論にしてもそうだが、とにかく権力を持つている者が弱者をしいたげるといふことが行われているのは、科学的な研究からみても知識と正義に適うものではなく、決してよい社会を、ほんとうの意味の人類の発想をもたささないものだということを知り、それがちょうどキリスト教の信仰と合致した。そういうところが私の平和についての考えの根本にあつた。

戦後の矢内原忠雄の学問的仕事を俯瞰すると、戦前からの仕事の延長線に立つ業績に『帝国主義研究』（白日書院、一九四八・四）があり、国際経済論と講座名を変えてからの仕事としては、楊井克巳との共著『国際経済論』（弘文堂・一九五四・四）がある。本書の第一部（矢内原忠雄執筆）は、戦後の東大での講義を活字化したものだ。彼は学問的著作を、この時期も戦前同様もつと刊行したかったに違いない。が、小石川に部屋を借りて保存していた膨大な関係書籍を戦災で失うという不運、それに社会科学研究所長・経済学部長・教養学部長・総長と続いた激務は、専門分野での書物刊行の時間を奪うことになる。

が、彼は書くことはもとと好きで、その文章表現力は、若き日から抜群のものがあつた。しかも、時代は彼にジャーナリストとして肩書きを与え、その発言を重視した。忠雄はそうした時代の要請に応じて、多くの大学論や平和論を書き継いだ。著作目録を一見すると、驚くばかりの旺盛な評論活動である。それらは『日本精神と平和国家』（岩波書店、一九四六・六）、『日本の傷を医す者』（白日書房、一九四七・七）、『講和問題と平和問題』（河出書房、一九五〇・三）、『大学について』（東京大学出版会、一九五二・一）、『日本のゆくえ』（東京大学出版会、一九五三・四）、『銀杏のおちば』（東京大学出版会、一九五三・一）などに収録される。東大総長退任直後に刊行された『主張と随想』（東京大学出版会、一九五七・二）には、これから述べる沖繩訪問における講演七編が収録されている。

矢内原忠雄は一九五五（昭和三〇）年十二月に、東京大学総長に再選されている。ちなみに国公立大学の総長（学長）の任期は、各大学の「選挙規定」によれば、一般に四年であり、再選可能が多い。

ただしその場合は二年で、通して六年を越えることはない。ポポロ事件にはじまった矢内原総長の人気はまずまずであった。当初は就任を尻込みしたほどの総長職も、再選の頃には板に付き、彼は本腰を入れて大学改革に取り組むようになる。彼は学内外のことを熱心に学び、大学行政家としても四年を経て、一流の実務家となっていた。再選は当然であった。

もともと矢内原忠雄には、リーダーとしての素質があり、神戸一中や一高時代にも、その才能は輝いていた。一高時代は、彼の活躍があまりに目立つので、独法科の倉田百三から『第一高等学校校友会雑誌』で、たしなめられるということもあつた。このことは第三章の「四 倉田百三の忠雄批判」で詳説した。戦後、東京大学の総長という大学トップの座に就き公務を無難にこなす中で、彼の指導力・統治力は磨かれていった。彼は再選されたことを神の御心と信じ、職務により精を出す。

東大総長在任中、矢内原忠雄は一九五六（昭和三一）年五月から七月までの約五十日間、フランス・イギリス・ドイツ・スイス・イタリア、それにインドに出張している。「欧州遊記」は、その記録である。この旅では、若き日の在外研究時代の下宿跡を見て回っている。西ドイツでは、なつかしい Dahlem, Werdersstrasse 24 の下宿先まで出かけている。第六章三で述べた若き日の想い出の地である。彼は「昔ヴェルター通、今は改名してハーベル・シュウェルター街」といつている通りの二四番地は、私が留学中寓居していた処で、そのあたりは戦災を受けず、家も昔のままであった」と書いている。一九五七（昭和三二）年には、沖繩（二月）、次にアメリカとカナダ（二〇月）を訪れることになる。彼は旅を厭わない。若き日から旅は

彼と共にあり、旅は彼の思索の源泉であった。旅に出ることで、筆の人矢内原忠雄は考えを深め、輝いた発言をする。沖縄旅行もそのような彼の思索の旅となった。

当時沖縄は未だアメリカの統治下にあり、パスポートの申請や検疫などもあって、外国へ行くようなものであった。忠雄の戦前からの専門は、植民政策である。そうした彼はアメリカの沖縄統治がいかなるものかに、強い関心をもっていた。そこで沖縄教職員組合と琉球大学の招きに、よろこんで承諾したのである。文部省からは「南西諸島（沖縄本島）への出張を命じる」との言質を取った旅であった。一九五七（昭和三十一年）一月は、沖縄で「島ぐるみ闘争」と言われた、大規模の抵抗運動が展開されて半年後という時期に相当する。忠雄は沖縄の脱植民地化に、日本国はどう責任をもつかを短い旅の中で考えることになる。

矢内原忠雄の「沖縄旅行」と題した文章には、旅の要点が記されている。一九五七年一月十五日の夜十一時三十分羽田発の日航機で、矢内原忠雄は沖縄に向かう。飛行機は翌朝四時、那覇空港に着く。琉球ホテルで小憩後、彼は直ちに琉球政府行政主席と南方連絡事務所長を訪問した。矢内原忠雄の旅は、今回も強行軍であった。この日も到着した十六日の午後二時から首里の琉球大学で屋外講演をしたのにはじまり、視察と講演に明け暮れている。琉球大学の講演は、「世界・沖縄・琉球大学」と題して行われた。内容を紹介しよう。

全文は四百字詰原稿用紙にして約四十八枚、「私と沖縄」「移民問題と沖縄」「植民地問題」などという小見出しが付き、原稿化したものは読みやすい。「私は今朝早く那覇の飛行場に着きました。当

地に来たのは初めてであります」にはじまる。会場は校庭であり、多くの聴衆が詰めかけた。聴衆は「沖縄旅行」によると、「全学生一、五〇〇名の外、高等学校生徒や一般市民を会せて約五、〇〇〇名」とある。聴衆はグラウンドに座って、マイクを通して話を聞いたようだ。「私は今日みなさんにお話するについて、こういう広いところでお話するとは思っていませんでした。その上に琉球大学の学生諸君のほかに、高等学校の生徒さんたちもたくさんお見えになっておるのであります、私の予想とは異なります。少しお話がむづかしくなるかも知れませんが、皆さんのお尻があまり痛くならぬうちにやめますから、御辛抱おねがいしたいと思います」と彼は語り出す。

矢内原忠雄は移民問題と植民地問題から話をはじめ。特に後者の植民地問題は、彼の戦前からの研究課題だけに熱を帯びる。矢内原は沖縄の三問題を、一 移民の問題 二 沖縄自体の島内における政治、経済、文化についての問題 三 世界の軍事的な勢力関係における沖縄の位置の問題として示す。彼はこうした問題整理をしたうえで、平和問題を持ち出す。「今日の国際問題を考えてみると、どうしても世界の平和は必要である。世界は平和でなければならぬ」という持論を展開するのであった。その上で大学の任務と使命に及び、学問の自由と真理探究の精神にふれて論を結ぶ。

翌十七日は、午前九時半ホテルを出発し、南部戦跡めぐりをする。ひめゆりの塔・魂魄の塔・健児の塔などを歴訪した。案内をしたのは、琉球大学副学長の仲宗根政善であった。仲宗根は大学卒業後、沖縄第一高等女学校や沖縄師範学校女子部で教え、ひめゆり学徒隊の引率教員となった経歴の持主であった。「氏が言葉少なに語ると

ころによって、戦渦のいかにむごいものであったかが窺われた。戦争のいかに罪悪であるかを知ろうとする者は、沖繩の南部戦跡を来て見るのが最も捷徑であろう」と忠雄は「沖繩旅行」に書いている。

午後は那覇に戻り、一時半から沖繩教職員組合の教育研究会会で講演をした。会場は那覇で最も多くの人員を収容できる映画館で、会員二、五〇〇人のほか一般聴衆を合わせると四、五〇〇人にも達し、会場は立錐の余地なく、場外にはみ出た人も多くいたという。

講演は「教育の基本問題について」であった。この講演でも民主主義と平和問題が強調された。活字化された「教育の基本問題」からその中核的な個所を引用すると、「平和主義は、人間と人間とが交際するに際して相互の人格を尊重すれば当然平和になる。力をもつて、腕力をもつて、暴力でもつて、武力でもつて、他の人間を打ち倒すということが、平和の反対で、暴力闘争であります。人格を尊重するという人間観からは、当然人間対人間の交際は平和でなければならぬ。暴力闘争、暴力手段は否定する。これは民族と民族との交際に応用しても、原理的には同じであります。だから民主主義の教育と平和主義の教育とは、人格を尊重するという同じ根本理念から生じている二つの目標でありまして、内容的に関連のあることなのです」とある。彼はこの立場に立った教育の必要を、「教育と政治」「教育と経済」「教育と文化」などに分けて語った。この日の夜は、東大出身者二十数氏との懇談会があった。

十八日は午前沖繩教職員会館、民芸の手工業の紅房漆器店とつぼ屋陶器店などを視察した。午後は沖繩中部のゴザ市(現、沖繩市)のゴザ中学校で沖繩教職員会のために講演をする。教職員のほか高校生や一般市民も加わり、ここでも聴衆は多かった。ゴザは米軍基

地の中心で、典型的な基地の街である。忠雄の講演は、「教育の基本理念としての人格観念とそれに基づく民主主義と平和主義を主とし、沖繩人が日本民族としてもつべき自覚と希望について付け加えた」(「沖繩旅行」という。短い沖繩滞在中、忠雄は講演に明け暮れた)。「首里キリスト教会での主日礼拝でのメッセージなど、教会関係のものを含めると七回にも及ぶ。声がかかれば都合の付く限り彼は出かけた。

この日は、講演終了後、東海岸沿いを北に車を走らせ、石川・金武・宜野座・久志を経て、山地を西に横断し、名護町(現、名護市)に出て、厚養館という旅館に泊まる。十九日は名護の中心部から北へ車で三十分ほどの屋我地の国頭愛楽園を訪問する。

国頭愛楽園(現、国立療養所沖繩愛楽園)は、一九三八年十一月十日開園のハンセン病の療養所である。初代園長は塩沼英之助で、「沖繩旅行」にも、「ここは癩療養所で、戦前塩沼英之助君が初代園長として赴任経営に当たったところであり、戦後井藤道子さんが数年働いたところである」と出てくる。塩沼英之助は一九〇三(明治三六)年生まれで医師で、愛楽園の初代院長である。井藤道子は忠雄と同じ愛媛県出身、一九一七(大正六)年生まれで看護婦で、歌人でもあった。塩沼も井藤も共に熱心な無教会主義のクリスチャンであり、忠雄とは親しく、愛楽園のことも二人から何かと聞いていたであろう。特に井藤道子は忠雄を師と仰ぎ、若き日からその指導を受けていた。『矢内原忠雄全集』第二十九巻には道子宛の忠雄書簡が十四通収められていて参考になる。

忠雄は十五年戦争時代から何度か香川県のハンセン病施設の大島青松園を訪れている。石本俊市「生きることを教えられて」²³⁾による

と、一九四四(昭和一九)年五月十九日に来園した忠雄は、職員と患者を前に話をし、「この騒々しい気狂いじみた世の中にあつて諸君こそ真に国家の前途を憂慮し、世界平和のために静かに祈ることが出来る場におかれている。またその祈りこそもつとも大切である。諸君にはまだ社会の誰にもできない尊い残された使命がある。祈りの伏兵としてこの所で熱心に祈つていただきたい」と諄々と説いたという。「祈りの伏兵」とは、実に巧みな言い回しである。

本論の第一章で、忠雄に大きな影響を与えた祖母とよにふれたが、彼女は四国巡礼のハンセン病患者を家に泊めるなど、この難病に対する理解と同情が深かった。それは後年の忠雄に伝播したかのようだ。鴨下重彦は「矢内原の伝道で、他の無教会伝道者にみられない、際立つて特殊なもの一つは、ハンセン病(ライ)療養所への伝道である」と書く。この指摘は矢内原忠雄のキリスト教伝道を理解するに役立つ。忠雄は愛楽園訪問以前にも第二次世界大戦後の一九五六(昭和三一)年十一月に、鹿児島県鹿屋市の星塚敬愛園を訪れるが、それはハンセン病患者への深い関心と同情あつてのことであつた。

早く矢内原忠雄に、「全国癩療養所の各位に」(通信)第4号、一九三三・二二という文章がある。これを読むと、この病に他人事でない同情を示していることがよくわかる。「私と癩病」と小見出しの付された箇所には、「私の郷里は四国の愛媛県で、四国八十八箇所巡礼の通り路になつて居ります。気の毒な癩病患者の巡礼姿を、私は小供の時からよく見ました。暑い日に喘ぎながら荷物を背負つて行く姿や路傍の草の上に足を投げ出して休む姿や、私の家の門口に立つて喜捨を乞ふ姿や、時には又吠えかかる犬に杖をふり上げる有様

など度々見たのであります。其の様子を見て小供心にも気の毒に思ひました。私の祖母は仏教信者で門口に立つ癩者の巡礼にも差別なく憐憫を施しましたから、それが私にも多少の感化を及ぼしたのでせうが、若しさうでなかつたら私も或は石でも投げつけたかも知れません」と彼は書く。

また、この文章では、「癩病を穢れとして隔離することが神の目的ではありません」とも言う。当時、ハンセン病は伝染する、不浄だということ、病者は差別され、療養所でわびしい生活を強いられていた。忠雄はそうした国の政策に大きな疑問を抱いていたのである。そして、イエス・キリストとハンセン病のような「重い皮膚病」とのかかわりにも言及し、イエスこそが「人生の希望と力の源である」ことを説く。

『通信』、そして後誌『嘉信』の読者には、ハンセン病患者が何人もいた。国頭愛楽園にも『嘉信』読者がいた。彼らに希望と勇気を持つて生きることを、忠雄はいつも強く願ひ『嘉信』の記事にも反映させていた。それ故、彼は沖繩訪問の目的の一つに、この療養所訪問を考え、日程に組み込んでいたのである。かつてハンセン病患者には、右に記したような隔離政策がとられ、彼らは世の人々と遮断される生活を余儀なくされていたのである。忠雄はそれに強い疑いを持つていたのであつた。

「らい予防法」が一九九六年(平成八)年四月一日に、「ハンセン病問題解決に関する法律」(法律第28号)の成立で、廃止されるはるか以前に、矢内原忠雄は隔離政策に疑問を抱いていたのだ。患者たちは、忠雄の『嘉信』に載るハンセン病問題の記事に、励まされることが多かった。そのことを知っていた忠雄は、忙しい沖繩旅行の

日程の中に、国頭愛楽園訪問をあえて取り込んだ。そして世話人の新崎盛敏に申し入れ、園にはあらかじめ連絡をとっての訪問となった。「沖繩旅行」には、「患者総代古見君や、青木（恵哉）君、徳田（祐弼）君など、前々から名を聞いていた古い患者たちに迎えられた時は、兄弟か親類に会ったような心安さを覚えて、親しさの感情をおさえることができなかつた」とある。

愛楽園では、「講堂で患者・職員一同に話をした。私は諸君を「慰問」に來たのではなく、同じ人間として、兄弟としての愛の交りのためであると前ぶれして、人のかえりみない種類の人々を特に愛されたイエスの愛について、三〇分ばかり語つた」という。続いて「在園者から歓迎の句や歌や詩の朗読があり、総代の謝辞があつて、一同、讚美歌四四一番「神ともにいまして」を涙とともに心から歌つた。私だけでなく、同行の琉球大学仲宗根副学長や、教職員会の屋良会長などにも、この愛楽園での一時間は深い感動を与えたようすであつた」と忠雄は書く。

なお、矢内原忠雄とハンセン病に関する文献に、早く非売品の『野菊 矢内原忠雄先生とらい療養所』（野菊刊行会、一九六五・一）があつたことを記しておきたい。これは稀覯本ながら、今井館資料館にはある。また、荒井英子『ハンセン病とキリスト教』（岩波書店、一九九六・二）もあり、そのかかわりの深さを語る。なお、近年の松岡秀隆「矢内原忠雄とハンセン病」（友月書房、二〇一六・五）は、沖繩旅行における愛楽園訪問をも含めての矢内原忠雄のハンセン病患者への思いと関わりが、いかに深かつたかを詳しく考察した労作で参考になる。さて、愛楽園訪問を終えた忠雄一行は、今帰任の半島を巡る。本

部あたりからは基地のための接収で問題のあつた伊江島を海上に眺め、名護に戻り、二時からの名護中学校での講演に臨む。ここも聴衆が多く詰めかけていた。彼は教育の基本問題を中心にし、外国軍のため土地と国を失つたイスラエル民族の歴史を引いて、希望とはなにかに及ぶ話をした。どこに行つても、忠雄には強行軍の日程が待っていた。

この日は午後四時過ぎに名護を出発、西海岸を南下して六時頃那覇のホテルに着く。そして、夕食もそこそこにして夜の八時から那覇のプロテスタント教会各派合同の講演会（会場、那覇商業高等学校）で、ミカ書第四章を用いて平和の預言を宣べ、キリストの救いについての証言をした。聴衆は場外に溢れ、二、五〇〇人ほどだったという。「盛んな、賑かな集会であつた」と彼は「沖繩旅行」に感想を記している。

二十日は日曜日であつた。忠雄は午前十時から首里の新教各派連合同礼拝（首里キリスト教会）で、「平和の福音」と題して五十分ほどのメッセージをする。普段は百人ほどの礼拝は、この日は八〇〇名を数えたという。「沖繩旅行」によると、「キリストの再臨し給う時、社会的物質的にも神の国は沖繩の島にも現れるべきことを宣べて、沖繩の兄弟姉妹を励ました」という。さらに語を継いで、「昨夜と今朝と二度のキリスト教講演において、私は聖書の言をもつて米国をさばき、沖繩に救いの希望を宣べ伝えたつもりである」とその真意を語る。

彼はどこにあつても、福音を恥とせず、宣教に従つていた。彼の平和論は沖繩の現状を見、沖繩に叫ぶ民の声を聴くことで、より強固なものとなるのであつた。帰国後すぐに筆を執り『朝日新聞』（一九五七・一・二八）に寄せた「現地に見る沖繩の諸問題―不安定な生活

の基礎 国際問題として解決を―」には、「沖繩は悲劇の島であり、矛盾のかたまりである」の一文も見出せる。彼は誠実に沖繩の当時のきびしい現状を語ってやまない。

五日間（厳密には四日半）で、前述のように七回の講演を彼は沖繩で行った。どの会場も満員である。季節は沖繩のゴールデンシーズンとされる一月、彼は休む間も惜しむかのように、各地をめぐり、平和と神の国の到来を語った。最後の日は、講演を終えると首里の教会から直接飛行場に向かい、午後一時三十五分発の飛行機に飛び乗っている。

後年、矢内原忠雄の植民地関係資料が琉球大学付属図書館に、子息矢内原勝（当時慶応義塾大学教授）によって二度に亘って寄贈されたのも、こうした縁によるのである。大河原礼三編『矢内原忠雄研究文献リスト』巻末に寄せた斎藤英里「矢内原忠雄関係資料の豊かな遺産―矢内原忠雄文庫の意義―」という解説に、その経緯と所蔵資料のおおよそが記されている。なお、現在琉球大学付属図書館の矢内原忠雄文庫の詳細は、データベース化されているので、パソコン上でも容易に見ることができる。斎藤英里は右の解説文で、十一項目に分類された矢内原資料の内容を簡潔に紹介し、その意義を述べている。

四 死とその前後

一九五七（昭和三二）年一月二十日、矢内原忠雄は無事沖繩旅行から帰宅する。その十日後、彼はまたも旅に出る。東海への旅である。『嘉信』第二十卷第二、三号（一九五七・二、三月）に、その旅行

記「東海の旅」を見出すことが出来る。伝道旅行であった。

各地での講演は、二月一日午前の奈良県榛原町（現、宇陀市）の榛原高等学校にはじまり、午後の名古屋聖書研究会主催キリスト教講演会では、「平和の福音」と題したメッセージを語った。会場の名古屋大学医学部講堂には、八百名を越える聴衆が集まり、盛会だったという。静岡では静岡大学で午後一時から「学生と人生」と題して講演をした。続いて、同じ場所での静岡嘉信読書会主催の講演会に出る。

矢内原忠雄は相変わらず精力的である。各地をめぐり、講演や聖書講義をするのが己の使命であるかのように伝道旅行に精を出す。この年は東海地方のほか、群馬県沼田町（二月）、長野県野沢町（五月）、仙台・大阪・京都・名古屋（六月）、札幌・小樽・妙高・松本・木曾（八月）、茨城県東海村（九月）、甲府・長崎・群馬県桐生市（十一月）と席の暖まる暇もないほどであった。未だテレビは十分普及しておらず、講演会全盛の時代とはいえず、多いところでは八百人、時に千人を超える聴衆を集めるのだからすごい。平成の今日においては、考えられない数である。

彼は今や講演者として引つ張りだであった。なぜ、一キリスト者矢内原忠雄は、講演者として、このような人気を得たのか。戦中の抵抗者としての強いイメージ、そして現職の東京大学総長の肩書きもさることながら、彼には伝道という使命感があり、常におこることなく謙虚に語るので、喜ばれたのである。彼は講演を依頼されると、伝道のおき機として、都合がつく限り、断ることなく各地に出かけた。他方、執筆活動も依然衰えを見せず、諸新聞や『世界』などの総合雑誌への寄稿、それに個人誌『嘉信』も定期刊行を守つ

ている。

一九五七（昭和三二）年三月二十七日、午前十時から東京大学で第八十回卒業式が行われ、忠雄は総長として最後の卒業式式辞を述べる。当日の『毎日新聞』夕刊が、「総長かこみ恒例ビール会」の見出しで、写真を添えて報じている。記事は「会場には早くも背広姿が目立って多く、学生運動の闘士もこの日は喜びを胸に包んで神妙に待望の卒業証書をいただいた。学生総代には故三木清氏の遺児三木洋子（二三）が選ばれて証書を受け満場の拍手を浴びた」とあり、以下忠雄の式辞を次のように伝えている。

矢内原総長は『日本という船のカジは近ごろ急に転換の傾向が見え、政界、財界の腐敗には目をおおいたくなるものがある。このような社会に諸君はどんな心構えで出て行こうとするのか……』と述べたのち、イギリスの詩人ワーズワースがジョン・ミルトンをしたったソネットにならない『ミルトンよ、汝いま生きてあれかし。日本は汝を要す。彼女はいまや汚水の沼なり』と新卒業生を激励した。

いかにも忠雄らしい文学的修辭に満ちた式辞であったとしてよい。しかも内容は相変わらず批判力に満ちたもので、衰え知らぬ氣力を感じることができる。

同年十月八日、インド首相ネル（Jawaharlal Nehru）が、東大を訪問した。忠雄は大学を代表して歓迎のことばを述べる。『矢内原忠雄全集』第二十一巻に「インド首相ネル氏歓迎のことば 一九五七年十月八日、東京大学図書館貴賓室において」と題された一

文が収録されている。「解題」には、自筆原稿からの採録とある。この一文の中で忠雄は、「我々日本人がインドを知るのには多く欧米人の研究を通してであり、又インド人が日本を知るのと同様であつて、両国民が直接にお互を知ることがそんなに多くあつたとは言へません」と言い、今後は「もつと直接に知り合つて、互の国民的興隆を助け合ふと共に、互に協力して世界の平和を維持する為めに努力することを必要とします」との先見的提言を口にしてゐる。かつて『帝国主義下の印度』（大同書院、一九三七・三）を刊行した忠雄にとつて、インドは決して遠い国ではなかつたのである。

ネルを東大に迎え歓迎あいさつをした翌日、十月九日から二十五日までの約半月、忠雄はアメリカおよびカナダへの出張を命じられ、各地を歴訪した。東大総長としての最後の大きな勤めであつた。アメリカは三度目の訪問である。彼は旅を苦にしない。好奇心は依然旺盛ゆえ、旅することは大きな喜びでもあつた。『嘉信』の「雑報」によると、主な訪問先はスタンフォード大学とカリフォルニア大学（バークレー校とロスアンゼルス校）、ユタ州立大学、ブリガム・ヤング大学、それにカナダのプリテッシュ・コロンビア大学である。スタンフォード大学では、「日本の高等教育」と題した講演を行った。大学ばかりでなく、十三日の日曜日には、午前はサンフランシスコの教会で、夜はバークレーの教会で講演をしている。また、二十日の日曜日には、ロサンゼルス②の岩山友記という人の懇請で、その庭園に完成した岩山の完成を祝う献山式、「神の御用にささげるための式」の司式を行つてゐる。

この年（一九五七）十二月十四日、矢内原忠雄は東京大学総長を任期満了で辞することになる。しつしつ引き受けた総長職ながら、

辞任に際してはいささかの感慨も無きにしてもあらずであった。六年間は長いようで短かったと彼は思う。満五十八歳から六十四歳までの日々を、彼は東京大学総長として一日も休むことなく働いた。「東大総長の六年」²⁶⁾という文章では、六年間を振り返り「前任者の南原総長はいわば家康みたようなもので、戦後の混乱期にあつて新制大学としての東大の基礎をすえた明君であつたが、私の位置はいわば二代将軍秀忠で、外にむかつて威を張るよりむしろ内をよく治めて、以前の落ちつきを取りもどした住みやすい学園にしたいというのが私の念願であつた」と書く。

東大総長を辞しても、矢内原忠雄には各地での講演、新聞・雑誌への寄稿依頼が、次々に舞い込んだ。彼はそれらに誠実に応えていく。一九五八(昭和三三)年六月には、自由ヶ丘の家庭集会以来の同人雑誌『葡萄』、——それは戦後今井館聖書講堂での集会に際して『橄欖』と改題されていたが、それをさらに発展させるべく『山鳩』と改題刊行をはじめた。『嘉信』が全国区的雑誌なら、『山鳩』は今井館のある東京地方区の雑誌の意味があつた。彼はその思いを「創刊のことは」³⁰⁾として、『山鳩』1号に記している。引用しよう。

私が自由ヶ丘の家で家庭集会をしていた頃、会員の同人雑誌として『葡萄』というものを出していた。毎号四十部か五十部ぐらい製作していた。終戦後、家庭集会をやめて今井館の集会を始めた時、『葡萄』の代りに『橄欖』を出すことにした。これは『葡萄』の会員をそのまま受け継ぎ、それに新しい会員を加えて、最後には三〇〇人に近い会員数になった。しかし創刊後十年を経過したので、会員に更新の機会を与え、はつら

つたる信仰態度をもつて再出発することを適当と信じて、『橄欖』を解散し、新に本誌を創刊することにした。

東京大学総長の任期満了は、責任を下ろした安堵感と一抹の寂しさをもたらしたものの、忠雄は次々と来る仕事に追われることになった。翌年(一九五八)は、内村鑑三記念キリスト教講演会(三月三〇日、大阪、電気クラブ。四月五日、東京、女子学院。は無論のこと、依頼されるまま各地での講演に赴いている。五月だけを取り上げても、群馬県安中町の新島学園(五月二日)、神戸高校(五月七日)、大阪大学(五月一〇日)、東京女子大学(五月二日)、岩手大学(五月二九日)などである。各地での講演は、以後、死の年まで続く。なお、この年二月十八日、彼は長年の功績によって、東京大学より名誉教授の称号を授与されている。

総長退任後、矢内原忠雄は学生問題研究所の創設を提案、教育学部の教授沢田慶輔などと相談し、アジア財団の援助を得て、研究所の誕生に尽くした。忠雄は所長として週何回か通うようになる。矢内原忠雄晩年の仕事の一つであるこの学生問題研究所に関しては、海後宗臣の「矢内原先生の創設した学生問題研究所」³¹⁾に詳しい。海後はここで「学生問題研究所は矢内原先生の晩年四年間の仕事の一つであつて、病床にあつてもこの研究所の活動を考へておられた」と書く。

一九六〇(昭和三五)年は、日米安全保障条約改定の反対運動が全国的に展開した年であつた。いわゆる六十年安保反対闘争である。年初の一月十六日、岸信介首相ら条約調印全権団がアメリカへ出発した。当時の全学連主流派学生約七百人が羽田空港ビルに座り

込み、警官隊と衝突した。忠雄はこうした社会の動きには、相変わらず敏感である。彼は日本の将来を思い、東大総長時代から日米安保体制には批判的であった。それ故、折からの国会を取り巻くデモにも、無関心ではいられたのである。

前後するが、この年、一九六〇（昭和三五）年一月一日～二日は、新年聖書講習会がイザヤ書40～55章（第二イザヤ書）をテキストに葉山のレシー館で行われた。忠雄は一日午後四時からの開校式に臨み、夕食後第一回の講義を終えて就寝した。翌二日の未明、上背部に痛みを感じた。何はともあれ、講習会を何とか終え、帰宅した忠雄は、三日夜半には、かつて経験したことのない激痛を同部に感じ、以後その発作に苦しむことになる。以後も病状は変わらず、七日には黄痘の症状が加わる。九日、医者となっていた弟啓太郎が鎌倉から来診、絶対安静・面会禁止の処置をとった。十一日、東大病院田坂内科に入院となる。胆嚢炎と診断され、月末まで二十日ほど入院している。

忠雄に「病床雑記」という記録文がある。そこにはこの時の病状とその処置が的確に記録されている。それによると彼は日々「無理が過ぎぬよう気をつけながら走っていた」とある。さらに三日間の新年聖書講習会を終え、帰宅した日の夜半過ぎ、「講習会の時に感じたと同じ部位に、生れてこの方経験したことのない激痛に襲われ、明け方まで一人で苦痛と戦った」と告白している。四日には医師陳茂棠の来診を求め、痛み止めの注射を受けている。以下、五日以降十一日までの病状は、「病床雑記」に見られる本人の記録を、そのまま引用する。

五日、激痛発作に苦しむ。

六日、左側上下背部に激痛あり、右上腹部にケイレン性激痛あり。明け方三時、突如として生れてこの方経験したことのない全身の震えに襲われ、激痛のため大声を発す。

七日、投薬の結果、痛みを感じなくなった。黄痘の症状現わる。

八日、夜、劇しい精神的衝撃に襲われる。死と格闘の苦しみにあった。

九日、鎌倉の弟（医師）の来診を求む。午後来り、絶対安静と面会禁止を命ぜられた。

十日、本年最初の今井館集会であるが、外出を禁じられたので残念ながら行けない。集会は山田幸三郎君に頼んだ。これまで激しい下痢の時も菌痛の日も、病気のため一度も休んだことのない集会であるが、休むことも神の命であれば、おとなしく従わんのみ。胆嚢部に不快を感ず。

○十一日早朝、鎌倉の弟来診。相談の結果、直ちに東大田坂教授（筆者注、田坂定孝）の来診を求めた。風邪のため患者を見るのを遠慮しているとの事で、その推薦に従い吉利助教の来診を求めた。すぐに来てくれ、即時入院と決定し、午後四時東大病院田坂内科に入院した。それから毎日主に肝臓、胆嚢、胆管部の検査と治療を受けている。

今では痛みは全然去り、黄痘の症状も早く消え、経過は甚だ良好で、自覚的にはほとんどどこも悪くない。ただ内臓各部の機能検査と、今度の病気の正体をたしかめ治療の方針を立てるためと、医学的には残っている病状を除くために、なお数日の

入院治療をつづける事になっている。六十七年間、使い通しに
使って来た身体だから、神は強制休息を命じ給うたのである
う。

矢内原忠雄は、正に筆の人であった。末尾には、「一月二十三日、
東大病院田坂内科にて」とある。すると彼は入院中に、この文章を
書き上げているのである。冷静な自らの病状観察記録と言つてよ
い。しかも、すべてを神の手に委ねるといふ信仰が脈打っている。
この文章もそうだが、忠雄は病床にあつても個人誌『嘉信』の原稿
書きの手を休ませていない。続く文章で「昨日から少し気分がよく
なつたので、医師の許可を受け、病床でクリスマス講演の速記に筆
を加え、また病床聖句と病床雑記を書いて、原稿をつくつた」とあ
るのがそれだ。文中昨日というのは、一月二十二日のことであろう。
退院は一月三十日であった。

この年は内村鑑三没後三十年の記念すべき年であった。その記念
講演会は、大阪（中ノ島公会堂）と東京（女子学院講堂）で開かれ、忠
雄はそれぞれの会場で元気に講演をしている。大阪の演題は「主の
僕」、東京の演題は「宣教百年と無教会運動」であった。五月三日
の憲法記念日には、東京共済会館で開かれた憲法問題研究会講演会
で「内村鑑三の非戦論」と題して講演をする。日米安全保障条約改
定に反対する国民的運動は、この年五月から六月にかけて、最高潮
に達していた。連日、日米安保反対デモが国会を取り囲んだ。彼は
国の未来を憂えていた。六月十五日には当時の全学連主流派が国会
に突入し、警官隊と衝突、東大生樺美智子が死亡するという痛まし
い事件も生じた。

忠雄は襲いかかる病の中で、国の行く末を考え、やりきれない想
いに満たされていた。六月十二日には、憲法問題研究会の「民主政
治を守る講演会」(文京公会堂)に出席、我妻栄・大内兵衛・南原繁・
宮沢俊義らと日本の政治を憂える発言をしている。一方、彼はこう
した政治の季節にあつても、自らに課せられた宣教を忘れない。夏
は七月二十四日から二十九日まで御殿場東山荘(とうげんそう)第一回聖書講習会で
「ロマ書」を講じ、八月二十一日から二十四日までの第十回妙高聖
書講習会(妙高通信保養所)では、「イザヤ書」56〜66章(第二イザヤ
書)を、十月十日から十六日までの山中湖畔小聖書講習会では、「ミ
カ書」の講義を行っている。とにかく彼は病に侵されながらも、最
後までエネルギーに立ち働いた。

十月二十一日は山形大学で「学問と教養」と題して講演。前後に
は山形の『嘉信』読者と読書会を持っている。矢内原忠雄と山形と
のかかわりは、戦前からのもので、『矢内原忠雄先生と山形』(山形
聖書研究会、一九六二・一一)という追悼文集が、山形県在住の有志の
手でまとめられている。翌十一月の五日には、静岡県の県立沼津東
高校60周年記念講演で「世界の将来と青年の任務」を、十二日から
十六日まで、兵庫県姫路市、それに大阪豊中などで講演や『嘉信』
読者の集まりに出席する。

姫路では、十二日夜、姫路市公会堂(姫路駅前、現、市民会館)で、「日
本民主化の将来」と題して、十三日午後は、日本自由メソジスト教
団所属の姫路野里キリスト教会(姫路野里教会と略称される)で、「生
死の問題」と題して、ピリピ書一章二〇〜三〇節を用いてメッセー
ジを行っている。ピリピ書(新共同訳「フィリピの信徒への手紙」)は、
忠雄晩年の慰安の書であった。

姫路は忠雄にとつてはじめての地である。姫路野里教会（現存は、『嘉信』第二七四号（一九六〇・一〇・二〇）によると、姫路駅から自衛隊行きバスで十五分とのこと。わたしはこの記事を唯一の頼りに、なぜ最晩年の矢内原忠雄が、東京からかなり離れた西方の地、姫路の教会でメッセージをしたのかを調べるために、姫路野里教会を訪問した。

JR姫路駅北口から姫路獨協大学行きのバスに乗り、野里というバス停で降りた後、ちよつと迷つたが、何とか行き着くことができた。二〇一四（平成二六）年十二月七日の日曜日のことであった。日本の教会での主日礼拝は、多くは十時半から始まるので、その時間に到着するように行つた。この教会は、今は礼拝堂近くまで住宅が迫っているが、忠雄が訪れた戦後十五年の時点では、「野里」の地名通り、野辺の村里の面影を残した地であつたに違いない。教会は木造ながら、瀟洒な造りの会堂である。

姫路野里教会の現牧師は、誠実さあふれる女性牧師の中嶋嗣美氏であつた。礼拝後中嶋牧師から病弱の矢内原忠雄が、なぜ姫路に来て、公会堂や教会で話をしたのかをうかがつた。それによると、姫路野里教会は、中嶋氏の父永井貞雄氏をはじめた開拓伝道が淵源であり、現存の会堂は、一九五八（昭和二三）年四月に完成したという。永井貞雄牧師にかかわる永井春子（筆者注、貞雄の長男永井修の妻、当時日本キリスト教会香里園教会牧師）編『我が魂は塵につきぬ』という記念集（私家版、一九八三・五）も出ていて、一冊戴くことができた。

この本の「選びは動かず―老牧師の召命告白―」によると、永井貞雄牧師は小学校教師時代に内村鑑三の「基督信徒の慰」によつて信仰的に目覚め、河辺貞吉の自由メソジスト伝道学館の門をくぐつた

経歴の人である。無教会主義の聖書研究に徹する精神を多分に持つた方で、姫路伝道を応援して欲しいとの意図もあつて、忠雄を招いたのであつた。前夜の姫路市公会堂での「日本民主化の将来」のタイトルルの集会は、多くの聴衆を集め、大成功に終わったのに続き、当日午後二時からの姫路野里教会での集会への参加者も予想以上に多かつた。

当日の忠雄のメッセージがどのような内容だったのかは、幸いにも『未発表講演記録 生死の問題 矢内原忠雄』（私家版、初版一九九三・七）と題された小冊子があることを、わたしは今井館資料館の福島穆さんあしから教えられた。これは岩波書店刊行の『矢内原忠雄全集』全二十九巻にも、新地書房刊行の『矢内原忠雄「信仰と学問―未発表講演集―』（一九八五・五）にも入っていない。が、忠雄晩年の重要文献である。そこで少し解説を加えておきたい。

この講演のテープ起こしをして小冊子にしたのは、山田漢子なまこという婦人の方であつた。忠雄の講演を姫路野里教会で聴いてから四分の一世紀以上を経、当時の感激を噛みしめるかのようにして、録音テープから原稿化したものである。冊子巻末の山田漢子の「テープ起こしを終えて」には、講演当日の感想を「ああ、その時の感動感謝は深く、とても筆に書き記すことはできません。ただ小なりとも私もまた、まことのキリストの生命に生きる者でありたいと決意したのでした」とある。講演記録はしっかりとしたもので、まず講演会の次第が以下のように記される。

日時……一九六〇年十一月十三日午後二時
場所……姫路野里教会

司 会……永井貞雄牧師

讚美歌……二八四、三三七、五三四番

日時と場所、演題などは、『嘉信』にも記されているが、司会者と讚美歌は、この講演記録ではじめて確認した。司会は姫路野里教会の当時の牧師永井貞雄であり、讚美歌は二八四、三三七、五三四番が選ばれ、歌われた。矢内原忠雄の推薦曲なのか、教会側が決めたのかは、定かでない。が、その歌詞はいずれも当日の演題にかかわる生と死の問題を読み込んでいる。特に三三七番の「わが生けるは 主にこそよれ、／死ぬるもわが益、また幸なり」など、この日の演題にふさわしい歌曲であった。

教会での説教や講演では、当日の話にかかわる『聖書』の箇所を決め、司会者が朗読することが多い。この日の箇所は、ピリピ書(新共同訳「フィリピの信徒への手紙」一章二十二～三十節で、小冊子『生死の問題』の冒頭に、文語訳聖書の該当箇所が引用されている。讚美歌三三七番の歌詞が、ピリピ書一章二十～二十一節に負っていることは言うまでもない。矢内原忠雄は、すでに死を意識していた。そうした中で、長年愛読してきた『聖書』の「ピリピ書」が、彼に生と死の問題を考えさせるのであった。

「ピリピ書」は「喜びの書簡」と言われるほど、「喜び」ということばが多用される。「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい」(新共同訳「フィリピの信徒への手紙」四・四)は、本巻のハイライトでもある。「ピリピ書」には、〈希望をもつて生きよ〉のメッセージが託されている。一年後の忠雄の死を想うと、彼はパウロのフィリピの信徒に寄せた手紙が、自身にも宛てられたものとし

て理解できたに違いない。

矢内原忠雄は姫路野里教会に集まった人々に、「生という問題と死という問題、いかに生きるかということ、いかに死ぬるかということは、結局一つの問題であります」と言い、「使徒パウロのピリピ人への手紙について」語ることで、その要諦を伝えようとしたのである。姫路には忠雄の妻恵子が、健康を害している夫を心配し、同伴していた。薬を服用しての講演であったとは、先の中嶋嗣美牧師の証言である。その後、中嶋牧師の令嬢中嶋野花さんから、当日の写真集を送っていたのだが、恵子夫人が絶えず寄り添い、介護している様子がうかがえるものであった。

以下内容を、小冊子『生死の問題』に見ながらいまま少し考えることにしよう。忠雄は、パウロがギリシャの町の一つであるピリピの教会の人々に便りをした第一は、「生きるにも死ぬるにも、わが身によりてキリストの崇められることを自分は願っている」と、これが第一の点です」とする。生きる目的は、「キリストの栄光を現わすためにある」というのである。パウロが、そして終生の師内村鑑三が例話に巧みであったように、矢内原忠雄もまた、それに劣らない。当時起こった浅沼稻次郎殺傷事件や、姫路で知られる小学教師小出小平治の死にまつわるエピソードを紹介しながら、展開する。ちなみに、忠雄には『小出一家信仰記録』(三二書店、一九五三・七)という編著がある。信仰の継承を示した一家の記録で、忠雄としては珍しい書物だ。この本を編集することで知り得たことも生かされている。

キリストを信じるのが人生において如何に大切かを、忠雄はパウロ書簡を踏まえて、懇々と語る。ピリピ書三章十三～十四節の

「後のものを忘れ、前のものに向かつてからだを伸ばしつつ、目標を目ざして走り、キリストにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである」(当日用いられた口語訳「聖書」による)という、よく知られた箇所の説明には、「これはパウロ時代のギリシャ、ローマの世界において、極めて盛んだったスポーツの引例でありまして、パウロの書いた書簡には、たびたび出てくる陸上競技の例えであります」と言い、信仰とはキリストを見ることだとも言ふ。自己反省は信仰に益をなすものではない、自分をいくら反省的にみても、そこから出てくるのは雑念や妄想に過ぎない。キリストを見ればこそ、わたしどもの罪は赦され、新しい希望が与えられて成長していくと忠雄は言うのである。

忠雄は偶像礼拝をきびしく断罪する。彼の生涯尊敬した内村鑑三の扱ひも、「内村鑑三その人は人間でありまして、拝むこともできないし、模範とするにも足りない。模範とすべきものは内村鑑三を信仰によつて救つた神様そのもの、神を私どもは見なければならぬ」と断言する。彼は「人を崇めるということは偶像崇拜の一種であつて、これは間違い」とも言い、さらに「人物崇拜は偶像崇拜である。人物崇拜、偶像崇拜に行く人は、必ず信仰さえも、自分の信仰さえも失つて行く危険があるわけです」とまで言う。当時の彼は「三不可」ということばで、このことを個人誌『嘉信』(第23巻第11号、一九六〇・一一・二〇)に書いていた。まとめるなら以下のようだ。

後ろを見るべからず、前を見よ。
おのれを見るべからず、上を見よ。
人を見るべからず、神を見よ。

これは「ピリピ書」の基本精神でもある。矢内原忠雄は死を意識する中で、改めてパウロ書簡の「ピリピ書」に学ぼうとしていたかのように見える。姫路野里教会でのメッセージには、そのことが色濃く現れていた。新幹線という便利な交通機関がないころ、東京からるか西方の姫路までの旅は、病身の身にとつて容易ではなかつた。が、彼は乞われるままに姫路に来て、市の公会堂(現、市民会館)と姫路野里教会で話をした。忠雄はメッセージの中で、彼の体を心配する人々に対して「神の御言葉に従つてなす行動は必ず成し遂げられる」とし、「神の御心に従う者は、どんな危険にあつても死ぬることはない。けれども神の御心の時が来れば、どんなに生かしておきたくてもこの世を去る」と言う。続けて彼は「地上の生涯」に關して、次のように語る。

信者の生涯はキリストの力により、キリストの生命によつて生き、キリストの御栄えのために、それを目的として生き、キリストの生き給うたようにわれわれも生きるべきであります。神の定め給うた時において私どもは天に召される。それは、繰り返して申しますように、ある人は早く、ある人は遅く、その死の原因も死に方もいろいろであります。やがて誰も天に召される。けれども、それをもつて私どもの生が終わるわけではない。私どもの死というものには、生からさらに大きな生への囲いを、敷居をまたぐだけのことなんだ。一つの部屋におりまして、そして次の間のふすまをあけてみれば、さらに光輝く大広間が展開されているように、私どもが信仰を持って地上の生涯を送りまして、そして死という幕をまたいでみれば、さらに輝

く世界が、さらに輝く充実した生がそこに展開している、待ち受けられておりまして、子どもは生より生へと進んでいく。これが信仰の力、そういう望みを子どもが与えられているから、地上において子ども立場というものがちゃんと確立するわけです。地上の生活を正しく生きるということも、希望を持って生きるということも、そこで初めてできる。キリスト信者というものは、そういう恵みを与えられておりますから、地上において戦う戦闘力もそこから出てくる。希望も勇気も出てくる。すべてのことが絶望的で駄目だ、駄目だと思う時にも、キリスト信者には絶望ということが絶対にならないということも、そこから出てくる。こういう信仰を持つ者が、「汝らは地の塩、世の光である」とキリストによって、この世における位置づけを与えられているのです。

矢内原忠雄は初めての地、姫路において自身の一年後の死をも意識して、「生死の問題」を真剣に語ったのである。五層六階の美しい白鷺城は、当時修復中でカパーに蔽われ、見る事ができなかつたものの、忠雄は気持ちよく胸の中にたまった問題、「生死の問題」を人々に訴えたのであった。姫路からの帰途の十六日は、京都で下車、同志社大学で「日本で民主主義は育つか」を講演している。体の衰えを意識する中で、講演活動であった。

こうした忙しさの中で、矢内原忠雄は生存最後の年、一九六一（昭和三〇）年を迎える。年初一日から三日までは、神奈川県真鶴新年聖書講習会に出席。「ホセア書」を講義する。毎日曜日の今井館聖書講義でも「ホセア書」の講義を開始した。この年は内村鑑三生

誕百年記念講演会が東京・名古屋・大阪で開かれ、忠雄は三月二十六日の午後女子学院講堂で「日本の思想史上における内村鑑三の地位」と題して講演したのにはじまり、四月八日の名古屋での講演会（名古屋工業大学講堂）では、「内村鑑三と日本」を、四月九日の大阪講演会（大阪中央電気倶楽部）では、「罪の問題」を講演する。四月十六日からの今井館聖書講堂での講義は、「出エジプト記」となる。同二十三日には、NHKテレビの「内村鑑三先生を想う」に出演している。

五月十五日には東北地方の旅に出、各地で講演をする。山形県基督教独立学園高等学校はじめ、作並温泉河合ホテルを会場とした聖書講習会などで話をする。最後の東北旅行であった。忠雄はかなり衰弱していたが、神よりの召命意識に衰えはなかった。同行した山形県の『嘉信』読者の庄司源弥によると、「そのときの先生はすっかりお疲れになって、「出エジプト記」の講義も非常に小さい弱々しい声であった。神のため、人のため、精魂をつくして働らく人の姿を私はこのときの先生において見たのであった」と記している。

六月二十三日、東大教養学部で「人生の選択」を講演。駒場の九〇〇番教室が満員だったという。七月七日は現職の肩書き「学生問題研究所長」として空路札幌に行き、翌八日の午後、市民会館で「内村鑑三とシュワイツァー」の題の講演をする。九日は札幌聖書研究会の日曜集会で「出エジプト記の教訓」について語り、十日に帰京する。この旅も忠雄の健康のこともあって、恵子夫人が同伴した。

旅の疲れが十分とれないまま、翌月八月四〜七日の御殿場東山荘での第二回聖書研究会に出席した矢内原忠雄は、会終了後、山中湖畔の別荘で排尿時に激しい痛みを襲われる。東京の家に帰宅後の十

七日、前年厄介になつた東大病院田坂教授の診断を受けて入院、レントゲン検査の結果、胃噴門部の癌が発見された。もはや内科の範囲内ではなく、手術による癌細胞除去の必要があり、三十日に東大病院本木外科に移った。

九月六日、開腹手術が行われた。手術前後のことは忠雄の「発病記」に詳しい。この文章の最後に彼は、「みどころならば再び体力を取り戻す日のくることを信じ望んでいる」と書いていたが、その望みは達せられなかった。九月十五日、東京芝白金の伝研付属病院に移るも、十七日に「前立腺肥大に原因する猛烈な尿閉と激痛に襲われ、一週間非常に苦しんだ」（発病記）という。以後病勢は、日毎に進む。が、精神は最後まで研ぎ澄まされていた。

この頃（一九六一年秋）若き日、新居浜の住友別子鉱業所で共に働いた歌人の山下陸奥が菊の花束を持って見舞いに訪れ、忠雄と旅の話をする。山下の記すところによると、その時忠雄は、「当分だめだね」といつて自分で毛布をとって足を見せた。両足は骨ばかりのように痩せていた。「よくなればすぐ太るさ」と私は目をそむけながら言った。そうして「治つたら、仕事を今の三分の一に減らす事だね」というと「そうだね」と答えて微笑したが、死ぬまで、神と人類と学問の為に働くという信念はその痩せ衰えた顔面に、まざまざと現われていた^⑧とある。

十月十日付で『教育と人間』が東京大学出版会から刊行された。生前最後の著書である。忠雄は自著の刊行には、いつも校正に厳格に当たることを責務としていたが、今回は東大病院に入院中でもあり、「近くの者」（坂井基始良・矢内原勝）に任せることになる。こうした状況の中でも『嘉信』の発行は続いた。が、刊行はかなりきび

しい状況に追い込まれていたのである。『嘉信』一九六一（昭和三十六）年十一月号の巻頭に、忠雄は『嘉信』の危機」と題して、戦中の弾圧が第一の危機なら、今病氣のため足腰立たずの状況は、第二の危機だと書いている。この頃の忠雄の原稿は、すべて口述筆記（速記、村山民子）であった。

十二月二日、今井館集会の有志（藤田若雄・富田和久・大塚久雄）が、忠雄の信仰五十年を記念しての講演会（明治大学第9号館講堂）を開く。忠雄は出席は出来なかったものの、挨拶文（信仰五十年記念講演会への挨拶）を病床から口述筆記で送っている。それは会場で代読された。講演会の記録をまとめた書物『真理への畏敬』（藤田若雄・富田和久・大塚久雄著、みすず書房、一九六二・四）が、刊行されている。

忠雄の病因は、胃癌であった。が、当初は泌尿器系の病と診断されていた、上背部や胸部の痛み、それに前立腺肥大による頻尿時の痛みもあつて、胃癌とはなかなか断定されなかったのである。自宅に近い目黒の東大伝研付属病院（現、医科学研究所附属病院）に移つてからは、食事は喉を通らず、体力は日に日に衰えた。伝研付属病院に移り、最後の日々を過ごした忠雄については、北本治の「矢内原先生御入院の百日間」に詳しい。それによると「激しい腹痛、背中の痛み、胸部や腰の痛みなど、全身の痛みが出現しました時には、麻薬を使用する以外には有効な治療がなかった」という。彼はそういう状況の中にあつて、じっと耐えた。「その苦痛を罪との戦いと受け止めていた」（鴨下重彦^⑨）のである。

「病床苦吟」^⑩は、死の二ヶ月ほど前の詩である。量義治はこの三連詩の嘆きの詩を「六十八年の矢内原の生涯におけるもっとも凄絶

な罪との苦悶の姿である」と評した。それは「ヨブ記」の主人公の歎きにも重なる。激しい痛みの中にあっても、彼は具合がよければ人に会い、談話し、また原稿を書いた。病状悪化でペンを持つこともままならぬ時は、後述筆記に変えた。病は思考を時に中断させることもあったが、彼は薬を飲んでも書くことにこだわった。「病床苦吟」に続いて、忠雄は「迫害と病氣」というエッセイを発表する。ここでも自身の罪がきびしく問われている。「罪のゆるし」は、忠雄終生の課題であった。

十二月二十五日、十三時四十分、矢内原忠雄はこの世を去った。クリスマス日の召天である。ハンセン病患者支援に生涯を捧げ、忠雄を師と仰いだ井藤道子に、「別室にて我ら祈禱を終へし時師の臨終を聞く十二月二十五日午後一時四十分」(歌集『いぎり』私家版、一九九三・三)のうたがある。二十六日、東京都目黒区の今井館聖書講堂で納棺式が行われる。司会は白田斌（うしろだ びん）、奏楽は渡部恵一郎であった。追悼集『清き岸べに』(嘉信社、一九六二・六)の「あとがき」によると、「納棺式には慟哭が激しく、そのため涙は手巾をぬらし、嗚咽はやまなかった」とある。

十二月二十七日、東京都千代田区的女子学院講堂で葬儀が行われた。葬儀委員長は黒崎幸吉、司式は西村秀夫。この日、「弔辞」を述べた大内兵衛は、中で「学者としての矢内原忠雄、教育者としての矢内原忠雄、この偉大さはもちろん彼自身の人格の偉大さでありました。その人格の偉大は彼の魂の偉大によるものでありました。その魂の偉大は真理への忠誠、平和と人道への愛情によるものであります。そしてこの勇氣と、この力は、この人が聖書の真実に従うところの神の使徒であったからであります」と語った。大内兵衛は

生涯をマルクス経済学者として送った無神論者であったものの、矢内原忠雄を知るに及んで、キリスト教思想の影響を多分に受けた学者となった。矢内原忠雄は師内村鑑三同様、パウロの言う「わたしは福音を恥としない」に生きた人であった。立場は違うものの、大内兵衛は矢内原忠雄の生き方が「聖書の真実」にあることを見抜いていた。

同じく「弔辞」を述べた大塚久雄は、矢内原忠雄が「社会科学者としての鋭い眼とキリスト者としての鋭い良心をもって、昭和初年以來この国の歩みに対して、たじろがず妥協のない批判と警告の言葉をなげかけられ、その為に、さまざまな苦難の道を歩まなければならなかったこと」に、「むしろ摂理というべきものを深く考えさせられている」と言った。大内・大塚の二人とも、この地上で果たした矢内原忠雄の仕事と役割を十分理解していたのである。

十二月二十八日、告別追悼式が東京都文京区の東京大学安田講堂で行われた。こちらの葬儀委員長は、忠雄の後を継いだ総長の茅誠（かやせい）司がつとめた。司式は経済学部教授の安藤良雄であった。茅総長の「式辞」で明らかにされているのは、第二次世界大戦後の矢内原忠雄の学外での功績である。学内行政ばかりでなく、学外での活躍を、茅は以下のようにまとめる。本評伝が掬いきれなかった部分なので、以下に引用させていただく。

先生はまたとくに戦後、学外においても日本学術会議会員、中央教育審議会委員、国立大学協会会長、全国大学教授連合会長、国際経済学会理事長および同会長等を歴任され広くわが国学会教育界のために貢献されるところ大なるものがあつたので

あります。

総長ご退任後先生は静かな書齋の生活と熱情をこめた信仰の生活に戻りましたが、かたわら学生問題研究所を興してこれを主宰され自ら学生に面接してその相談に応じておられましたことは総長ご退任後も学生に対する講演のためしばしば本学に來学されたこととともに先生が教育と学生に対していかに強い愛情を最後まで持ちつづけられていたかということを示すものと存じます。

後半の学生問題研究所のことや、教育への熱意は先にふれたが、前半の各種公的会合の委員なり、会長職の仕事があつたこと、その評価は、今後明らかにされねばならぬことだ。

続く「弔辞」で経済学部長木村重義は、忠雄の研究を「植民政策を中心に体系化」させたとして評価し、さらに帝国主義下の植民地の人々に対して温い愛を、また、その植民地を統治する日本の不正と不義とに対して、激しい怒りを抱かれていたとまとめる。矢内原忠雄の学問と人間性を的確に評価した弔辞である。

友人代表南原 繁は「追悼のことば」で、『嘉信』の一九六一（昭和三六年）十月号を取り上げ、「あたかも処女作『基督者の信仰』に対応する、君が最後の著述といつていいでありましょう。その中の『病床苦吟』と題する一連の詩は、君が生涯の過去のいづれの時期にもまさつて、ヨブの告白をも想わしめる信仰の例示として、また詩篇にも似た美しい作品として残るであります」と称えた。南原は「形相」という歌集をもつ歌人でもあつたことは、すでに再三

ふれた。その面からの的確な「病床苦吟」評である。右の詩は、旧約の詩人ダビデの切なる祈り（詩篇）38篇など）と重なるとしてよいであろう。南原はさらに語を継いで、次のように遺影に語りかけた。

クリスマスの日に、君の魂は最後の輝きの後に、静かに天上に移されました——もはやいかなる強敵の攻撃の矢もとどかぬ遙かなる永遠の園に。

君は生前、しばしば自ら書きもし、語りもしました。「われわれの国籍が天に移され、生命の書にわが名が記されること——それがそが人生最高の目的と最大の幸福である」と。今その最大の幸福と目的が君において達成されたことを信じるとともに、私もそれを目ざして、君の範に倣つて、死に至るまでわれわれの信仰に忠信であらんことを願うものであります。

内村鑑三門下生として共に信仰の道を行んだ南原繁の、矢内原忠雄を天に送るにふさわしい、「追悼のことば」であつた。（完）

注1 一九五二年七月二日付、東京都目黒区自由ヶ丘 矢内原恵子宛書簡、

封書。『矢内原忠雄全集』第二九巻収録。三八二〜三八三ページ

2 鴨下重彦「昭和初期からの風雪の人」鴨下重彦・木畑洋一・池田信雄・川中義勝編『矢内原忠雄』東京大学出版会、二〇一一年一月二日。五七〜五九ページ

3 長谷川町子「思いでの人29 矢内原忠雄先生」「サザエさん うちあけ話」『長谷川町子全集』第32巻、読売新聞社、一九九八年八月一日

4 第一回山中湖畔聖書研究会は、一九三八年七月二四日から三二日まで

の八日間に亘って行われた。「山上の垂訓」「ダニエル書」、それに「カーライルの『衣服哲学』」の講義であったことが、「第一回」山中湖畔集會記(『嘉信』第一卷第八号、一九三八年八月)に見られる。約三〇名が出席した。

5 量義治『無教会の展開―塚本虎二・三谷隆正・矢内原忠雄・関根正雄の歴史の考察他―』新地書房、一九八九年一月二〇日。二四八ページ

6 無教会主義に関する文献は数多い。関根正雄は「無教会主義について」東大聖書研究会編『信仰と生活の中から』東京大学出版会、一九五八年一月二〇日収録で、「今日無教会主義は日本の社会乃至キリスト教界で無視し得ざる力であり、スイスの神学者ブルンナーを始め、欧米に於いてもこれに注目する者が二、三に留まらない。日本の社会の秀れた指導者が、無教会主義の陣営から出たのみでなく、聖書の学問的研究の水準に於いても教会のそれに決して劣らないのである」と言う。また、注5に掲げた量義治『無教会の展開―塚本虎二・三谷隆正・矢内原忠雄・関根正雄の歴史の考察他―』新地書房、一九八九年一月二〇日は、無教会主義の歴史にふれていて参考になる。特に「序章 無教会の展開」が有益である。他にも高橋三郎の『無教会主義の探求』新教出版社、一九七〇年一月二〇日、同『なぜ無教会か』教文館、一九八〇年七月一〇日、同『無教会とは何か』教文館、一九九四年九月三〇日、高木謙次『高木謙二選集4 無教会史研究』キリスト教図書出版社、二〇〇六年七月一日などがある。なお、近年の無教会主義に関する研究には、豊富な資料を駆使した赤江達也『紙上の教会』と日本近代無教会キリスト教の歴史『社会学』岩波書店、二〇一三年六月二六日がある。

7 矢内原忠雄『日本の基督教』『朝日評論』第一卷第一〇号、一九四六年一月二一日、のち『矢内原忠雄全集』第一五巻収録。二二八ページ

二二六ページ

8 内村鑑三『新教会』『新希望』第74号、「福音とは何ぞ他」『内村鑑三全集』第14巻収録。六六ページ

9 『日本の花嫁』事件』に関する参考文献には、佐波巨編『植村正久とその時代』第五巻、教文館、一九三八年九月一八日、七五九〜七六四ページ、井深梶之助とその時代刊行委員会編『井深梶之助とその時代』第二巻、学校法人明治学院、一九七〇年五月五日、三四一〜三九〇ページ。それに武田清子『田村直臣に見る家族主義道徳批判―日本の花嫁』事件をめぐって』『思想』一九五五年五月一日、のち『人間観の相剋』弘文堂、一九五九年八月一〇日収録。二八一〜二九七ページ。大田雄三『内村鑑三―その世界主義と日本主義をめぐって―』研究社、一九七七年八月二五日。土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、一九八〇年七月三〇日。二二〇〜二二六ページなどがある。

10 田村直臣『信仰五十年史』警醒社書店、一九二四年一月二八日。田村直臣の生涯を知ることのできる貴重な書物である。

11 関口安義『田村直臣』子供の権利』解説、上笙一郎編『日本(子ども)の権利』叢書1』久山社収録。一九九五年一月一日

12 無教会史研究会編『無教会史Ⅲ 対論―教会と無教会』新教出版社、一九九五年二月五日。一三三〜一六一ページ

13 政池 仁『無教会信者・矢内原忠雄』『矢内原忠雄全集』月報15、一九六四年五月、のち南原 繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄』信仰・学問・生涯』岩波書店、一九六八年八月三日収録。五八〇〜五八四ページ

14 矢内原忠雄『私の歩んできた道』東京大学出版会、一九五八年三月三一日、のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。五四〜五五ページ

- 15 矢内原忠雄「私の伝道生涯 第五 土曜学校と駿河台」『橄欖』15号、一九五四年二月、のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。一九九ページ
- 16 矢内原忠雄「日本の基督教」『朝日評論』一九四六年二月一日、のち『矢内原忠雄全集』第一五巻収録。二二三～二四四ページ
- 17 矢内原忠雄「忙人忙語」『橄欖』3号、一九四八年二月、のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。三三四ページ
- 18 広川禎秀「恒藤恭と平和問題談話会 時代の傍観を拒否した法哲学者」『戦後日本における行動する知識人』同志社大学人文科学研究所、人文研ブックレット42、二〇一三年一月二五日
- 19 注14に同じ。六二ページ
- 20 矢内原忠雄「欧州遊記」『嘉信』第一九巻第七～一二号、一九五六年七～二月、第二〇巻第一、三、四、六、七号、一九五七年一、三、四、六、七月、『人生と自然』東京大学出版会、一九六〇年一〇月二五日。のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。七六一～八〇二ページ
- 21 矢内原忠雄「沖繩旅行」『嘉信』第二〇巻第二号、第六号、一九五七年二月、六月、『人生と自然』東京大学出版会、一九六〇年一〇月二五日、のち『矢内原忠雄全集』第三巻収録。五〇〇～五〇八ページ
- 22 矢内原忠雄「世界・沖繩・琉球大学」『主張と随想』東京大学出版会、一九五七年二月一日。のち『矢内原忠雄全集』第三巻収録。三二六～三九一ページ
- 23 矢内原忠雄「教育の基本問題について」は、『主張と随想』東京大学出版会、一九五七年二月一日に収録された際、「教育基本問題」と改題され、のち『矢内原忠雄全集』第三巻に収録。三九二～四一九ページ
- 24 石本俊市「生きることを教えられて」『矢内原忠雄全集』第一三巻、月報13 一九六四年三月一日、のち南原 繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄「信仰・学問・生涯」』岩波書店、一九六八年八月三日収録。三八八～三九〇ページ
- 25 鴨下重彦「昭和初期からの風雪の人」鴨下重彦・木畑洋一・池田信雄・川中子義勝編『矢内原忠雄』東京大学出版会、二〇一一年一月二日。四七ページ
- 26 新崎盛敏「矢内原先生と沖繩」『矢内原忠雄全集』第一三巻、月報13 一九六五年一月一日、のち南原 繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄「信仰・学問・生涯」』岩波書店、一九六八年八月三日収録。四九一ページ
- 27 大河原令三編『矢内原忠雄研究文献リスト』自家版、二〇一二年三月(日付なし)
- 28 矢内原忠雄「献山式」『嘉信』第二〇巻一、二号、一九五七年一月。『人生と自然』東京大学出版会、一九六〇年一〇月二五日所収。のち『矢内原忠雄全集』第二五巻収録。二二～二九ページ。なお、東京目黒の今井館資料館に岩永友記編『矢内原忠雄先生のかたみ』と題された小冊子(非売品、一九六二・一二・一)が見出せるが、「献山式」と大内兵衛の「矢内原忠雄の一生」赤い落日(原文は「赤い落日」矢内原忠雄君の一生)『世界』一九六二・三)が収録されている。
- 29 矢内原忠雄「東大総長の六年」『毎日新聞』一九五七年二月一日。『主張と随想』東京大学出版会、一九五七年二月一日。のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。二二三～二七二ページ
- 30 矢内原忠雄「創刊のことは」『山鳩』1号 一九五八年六月、のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。三七七～三八一ページ
- 31 海後宗臣「矢内原先生の創設した学生問題研究所」『矢内原忠雄全集』月報21、一九六四年一月、のち南原 繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井

- 克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日収録。五三五―五三八ページ
- 32 矢内原忠雄『病床雑記』『嘉信』第三卷第一号、一九六〇年一月のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。四八六―四八九ページ
- 33 庄司源弥『矢内原忠雄―時流に抗言する学者、たたかう基督者の生涯と思想―』東北まねぶ社、一九九一年七月一日―二四四ページ
- 34 矢内原忠雄『発病記』『嘉信』第二四巻第一〇号、一九六一年一〇月、のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。四九一―四九二ページ
- 35 山下陸奥『新居浜時代のことなど』『矢内原忠雄全集』月報12、一九六四年二月、のち南原 繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日収録。五三―五七ページ
- 36 北本 治『矢内原先生御入院の百日間』『矢内原忠雄全集』月報29、一九六五年七月、のち南原 繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日収録。五六―五七一ページ
- 37 注2に同じ。六二ページ
- 38 矢内原忠雄『病床苦吟』『嘉信』第二四巻第一〇号、一九六一年一〇月二〇日。のち『矢内原忠雄全集』第一七巻収録。八〇―八〇六ページ
- 39 注5に同じ。一七五ページ
- 40 矢内原忠雄『迫害と病氣』『嘉信』第二四巻第二号、一九六一年一月二〇日。のち『矢内原忠雄全集』第一四巻収録。六九一―六九三ページ
- 41 大内兵衛『弔辞』『清き岸べに』嘉信社、一九六二年六月二五日。七八ページ
- 42 大塚久雄『弔辞』『清き岸べに』嘉信社、一九六二年六月二五日。八〇ページ
- 43 茅 誠司『式辞』『清き岸べに』嘉信社、一九六二年六月二五日。一〇四ページ
- 44 木村重義『弔辞』『清き岸べに』嘉信社、一九六二年六月二五日。一〇九ページ
- 45 南原 繁『追悼のことば』『清き岸べに』嘉信社、一九六二年六月二五日。一一七ページ
- 受領日 二〇一七年二月七日
受理日 二〇一七年六月七日